

村 下 遺 跡 I

— A地点・B地点の調査—

大野城市文化財調査報告書

— 第88集 —

2009

大 野 城 市 教 育 委 員 会

むらした 村 下 遺 跡 I

— A地点・B地点の調査 —

大野城市文化財調査報告書

— 第88集 —



2009

大 野 城 市 教 育 委 員 会

序

大野城市は福岡平野の一角に位置し、市名の由来となった大野城跡をはじめ水城跡や牛頸窯跡群など数多くの文化財に恵まれた街です。本市教育委員会では各種開発に先立って発掘調査を実施していますが、その結果さまざまなことがわかってきました。

今回ご報告する村下遺跡は市の北部にあり、試掘調査によって新たに発見された遺跡で、主に弥生時代の集落に関する遺構が確認されています。

本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、さまざまな形で活用されることを願っております。

最後に、発掘調査費負担のご協力をいただきました土地所有者や、調査に対してご協力をいただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が実施した、村下遺跡A地点・B地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、共同住宅建設に伴って実施したものである。
3. 当遺跡の整理作業は、入札によって株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、執筆の一部（「I. はじめに」）を大野城市教育委員会 舟山良一、検査を舟山・石川健が行った。
4. 報告書作成における業務分担は、次のとおりである。
 - ・遺物実測：本川美穂子、甲斐美江、宮本朗子、楢木もと子
 - ・デジタルトレース：藤井文子、毛利恒彦
 - ・遺物写真：松尾直子
 - ・執筆：松尾
 - ・編集：毛利、松尾
5. 遺構実測図中の方位は、磁北を表す。
6. 本文中での出土遺物量の表現は、20cm × 30cm のビニール袋と 40cm × 60.5cm × 15cm の整理用コンテナを基準に換算した。
7. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。
8. 遺物実測図中の断面黒塗りは須恵器で、断面斜線は石製品である。
9. 出土遺物の説明文中、甕の上げ底状底部の部位の名称は、接地面側を底面、胴部外面から続く面で、上げ底の側面にあたる部分を底部外面とした。
10. 本書の遺物・図面・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の結果	
1. A地点の調査	
1 調査概要	6
2 遺構と遺物	6
2. B地点の調査	
1 調査概要	21
2 遺構と遺物	21
IV. まとめ	29

表 目 次

表 1	村下遺跡A地点出土遺物観察表	25 ～ 27
表 2	村下遺跡B地点出土遺物観察表	28

図版目次

図版 1	(1) A地点. 調査区東半 全景 (南西から)	
	(2) A地点. 調査区東半 全景 (南東から)	
図版 2	(1) A地点. 1号竪穴住居跡 完掘状況 (北から)	
	(2) A地点. 3号竪穴住居跡・SK 14 遠景 (南東から)	
図版 3	(1) A地点. 3号竪穴住居跡 完掘状況 (南東から)	
	(2) A地点. SK 16 完掘・遺物出土状況 (南西から)	
図版 4	(1) A地点. SK 16 遺物出土状況 (北東から)	
	(2) A地点. SK 17 遺物出土状況 (南西から)	
図版 5	(1) A地点. SK 17 南側遺物出土状況 (北東から)	
	(2) A地点. SK 17 北側遺物出土状況 (南西から)	
図版 6	(1) B地点. 調査区全景 (南西から)	
	(2) B地点. SX 01 完掘状況 (南東から)	
図版 7 ～ 10	出土遺物①～④	

插图目次

第 1 図	周辺遺跡分布図(1/25, 000).....	2
第 2 図	村下遺跡A～J 地点位置図(1/5, 000).....	4
第 3 図	村下遺跡A 地点 遺構配置図 (1/200)・調査区壁面土層図 (1/20)	5
第 4 図	1 号竪穴住居跡 実測図 (1/40)・出土遺物実測図 (6 は 1/1、他は 1/4)	7
第 5 図	3 号竪穴住居跡 実測図 (1/40)	8
第 6 図	S B 02 P 1 出土遺物実測図 (1/4)	9
第 7 図	S K 14 出土遺物実測図 (1/4)	10
第 8 図	S K 16 出土遺物実測図① (1/4)	12
第 9 図	S K 16 出土遺物実測図② (1/4)	14
第 10 図	S K 16 出土遺物実測図③ (35・36 は 1/3、他は 1/4)	15
第 11 図	S K 17 実測図 (1/20)	16
第 12 図	S K 17 出土遺物実測図① (1/4)	17
第 13 図	S K 17 出土遺物実測図② (49 は 1/1、他は 1/4)	18
第 14 図	S K 55 出土遺物実測図 (1/3)	19
第 15 図	村下遺跡B 地点 遺構配置図 (1/100)	21
第 16 図	村下遺跡B 地点 出土遺物実測図 (68 は 1/3、他は 1/4)	22

I. はじめに

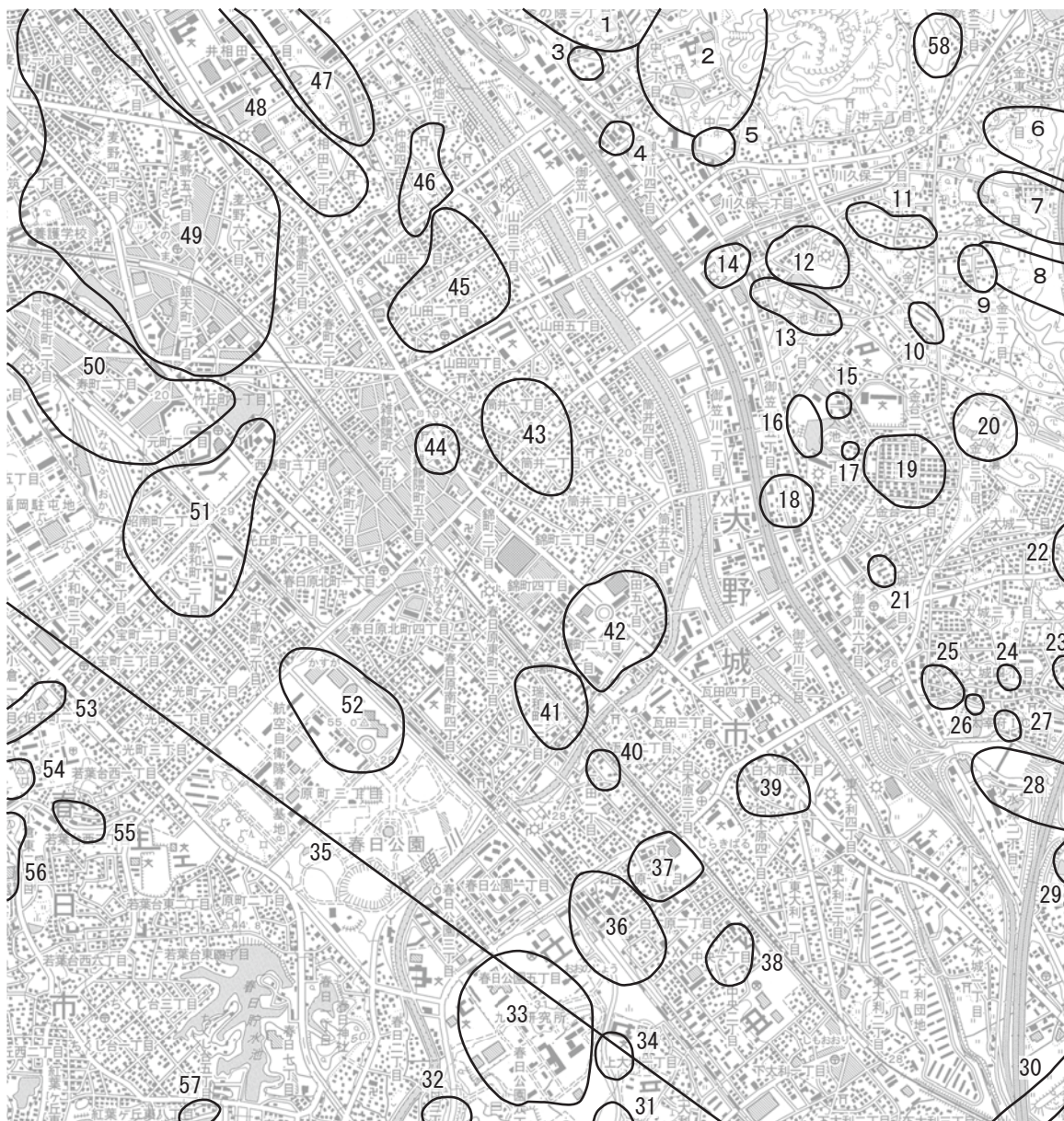
村下遺跡は1980年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』には登録されていない遺跡で、1987年に共同住宅建設のため試掘調査を実施したところ見つかった遺跡である。その後2008年（平成20）まで10回（A～J地点）の発掘調査を行ったが、今回報告するのはA・B地点の2ヶ所についてである。A地点の発掘調査は1987年（昭和62）4～5月に行ない、面積440㎡、B地点は1990年（平成2）7月に行い、面積約30㎡であった。

両地点の発掘調査は技師向直也を中心にして実施したが、整理作業は2008年（平成20年度）に実施した。整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	古賀 宮太
	教育部長	森岡 勉
	ふるさと文化財課長	舟山 良一
	文化財担当係長	中山 宏
	主査	徳本 洋一
	〃	石木 秀啓
	〃	丸尾 博恵
	主任技師	林 潤也
	〃	早瀬 賢
	技師	上田 龍児
	嘱託	遠藤 茜
	〃	石川 健
	〃	大里 弥生
	〃	甲斐 康大
	〃	中島 圭
	〃	大久保 玲子
	〃	井上 美一
	〃	玉ノ井 博紀

本市教育委員会では、発掘調査を担当した技師の退職等により報告書の刊行が遅れている発掘調査成果の公表については、平成18年度より順番を決めて業者委託により年次的に刊行する方針で臨んでいるが、本報告書がその3冊目になる。業者は専門業者による入札によって決定しているが、今回は株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店が落札したことから、同社に委託した。報告書掲載遺物の選択や実測図・原稿等の検査は本市教育委員会が行い作成した。

発掘調査に際しては、ご協力を得た地権者ならびに関係各機関に厚く感謝の意を表します。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 持田ヶ浦古墳群 | 2. 御陵古墳群 | 3. 今里不動古墳 | 4. 塚口遺跡 |
| 5. 御陵前ノ椽遺跡 | 6. 喜一田古墳群 | 7. 王城山古墳群 | 8. 古野古墳群 |
| 9. 花園遺跡 | 10. 薬師ノ森遺跡 | 11. 松葉園遺跡 | 12. 森園遺跡 |
| 13. 中・寺尾遺跡 | 14. ヒケシマ遺跡 | 15. 平隈遺跡 | 16. ウド遺跡 |
| 17. ウド古墳 | 18. 榎町遺跡 | 19. 銀山遺跡 | 20. 原口古墳群 |
| 21. 原門遺跡 | 22. 雉子ヶ尾遺跡群 | 23. 曲目遺跡 | 24. 深町古墳 |
| 25. 金山遺跡 | 26. 金山古墳 | 27. 笹原古墳 | 28. 成屋形遺跡 |
| 29. 裏ノ田遺跡 | 30. 水城跡 | 31. 池ノ上遺跡 | 32. 向谷北遺跡 |
| 33. 九州大学構内遺跡 | 34. 池田遺跡 | 35. 官道推定ライン | 36. 御供田遺跡 |
| 37. 後原遺跡 | 38. ハザコ遺跡 | 39. 原ノ畑遺跡 | 40. 国分田遺跡 |
| 41. 瑞穂遺跡 | 42. 石勺遺跡 | 43. 村下遺跡 | 44. 雑餉隈遺跡 |
| 45. 御笠の森遺跡 | 46. 川原遺跡 | 47. 仲島遺跡 | 48. 井相田遺跡群 |
| 49. 麦野遺跡群 | 50. 南八幡遺跡群 | 51. 雑餉隈遺跡群 | 52. 駿河遺跡 |
| 53. 伯玄社遺跡 | 54. ナライ遺跡 | 55. 西平塚遺跡 | 56. 高辻遺跡 |
| 57. 惣利窯跡群 | 58. 唐山古墳群 | | |

Ⅱ．位置と環境

大野城市は東に三郡山地、西に脊振山地を控えた福岡平野の東南部に位置している。市域は南北に長く、中央部がくびれた形である。福岡平野の主要河川の一つである御笠川が、市の北部を南東から北西へ向かって流れている。御笠川は宝満山に源を発し、博多湾に注ぐ二級河川である。支流としては脊振山地から派生する牛頸山を源とする牛頸川があり、御笠川、牛頸川がつくる沖積平野が発達している。

村下遺跡A地点は大野城市筒井1丁目498-2、B地点は大野城市筒井1丁目747-4に所在し、御笠川左岸の沖積平野に立地している。村下遺跡は現在までに10回（A～J地点）の発掘調査が行われており、その結果、弥生時代を中心として、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代、江戸時代など各時代の遺構が確認されている。今回報告するA、B地点はどちらも弥生時代の遺跡である。

福岡平野で代表的な弥生時代の遺跡は、板付遺跡や金隈遺跡をはじめとして多数あるが、ここでは大野城市内の弥生時代の遺跡について概観する。弥生時代前期の遺跡は、御笠川右岸の低丘陵上に多く立地しているが、集落の発見例は少なく、ほとんどが甕棺を持つ墓地である。前期中頃から後葉にかけての甕棺墓がある御陵前ノ椽遺跡（5）を初めとして、その西300mには前期後半から末までの塚口遺跡（4）、南東約600mに前期後半から中期の中・寺尾遺跡（13）が所在している。中期の遺跡は、低丘陵上にとどまらず、沖積平野にまで広がりを見せ、墓地ばかりでなく集落の形成が確認される。御笠川右岸には、中・寺尾遺跡に隣接して、中期初頭からの集落と中頃から後半にかけての甕棺墓が確認されたヒケシマ遺跡（14）、中期中葉から末までの甕棺墓がある森園遺跡（12）、甕棺は確認されていないが、祭祀土坑が検出された松葉園遺跡（11）が所在する。御笠川左岸の村下遺跡（43）の北1kmには、貨布が出土したことで有名な弥生時代から奈良時代までの複合遺跡である仲島遺跡（47）があり、弥生時代中期から後期の集落が確認されている。また、南750mには石勺遺跡（42）があり、夜臼式期の溝や中期の集落、甕棺を含む墓地が確認されている。後期の集落は確認されていないが、遺物は榎町遺跡（18）で確認されており、墓地としては、村下遺跡の西方300mに甕棺墓、箱式石棺墓、石蓋土坑墓が確認された雑餉隈遺跡（44）、南1kmに甕棺墓の瑞穂遺跡（41）がある。

弥生時代の福岡平野は大陸からの技術を受け入れ、春日丘陵に中心を持つ奴国が中期から大いに繁栄し、後期に青銅器製作も行われている。今回の調査地である村下遺跡は奴国の中心部からは東へ約2kmの距離にあり、周辺の遺跡とともにその影響下に入っていたであろうと考えられる。

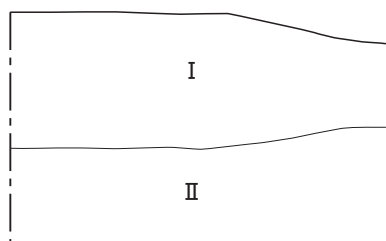
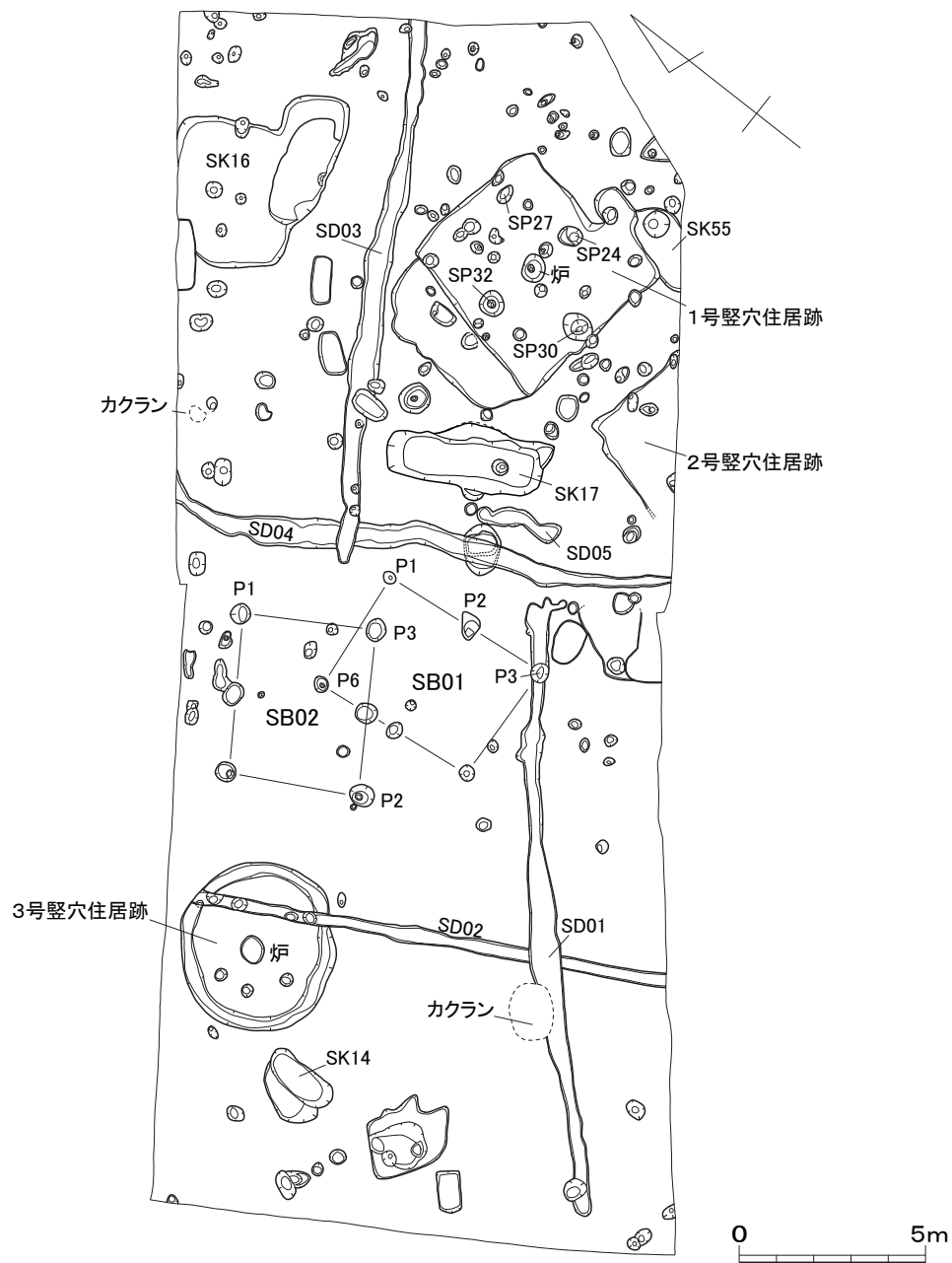
参考文献

『大野城市史 上巻 』 大野城市史編さん委員会 2005



地点名	調査回数	調査年月
A地点	1	1987 (S62) 4～5
B地点	2	1990 (H2) 7
C地点	3	1992 (H4) 7～9
D地点	4	1995 (H7) 4～5
E地点	5	1996 (H8) 5
F地点	6	2000 (H12) 11～2001 (H13) 1
G地点	7	2001 (H13) 7～8
H地点	8	2002 (H14) 4～6
I地点	9	2005 (H18) 1～2
J地点	10	2008 (H20) 12

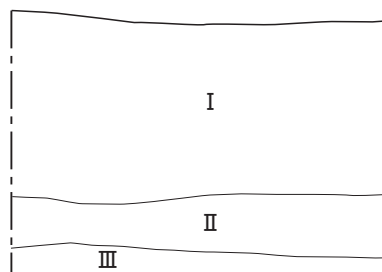
第2図 村下遺跡A～J地点位置図 (1/5,000)



南側壁面土層図

I : 埋土

II : 耕作土



東側壁面土層図

I : 埋土

II : 耕作土

III : (不明)

0 1m

※Ⅲ層の土層名については記録がない為、不明とする。

第3図 村下遺跡A地点 遺構配置図(1/200)・調査区壁面土層図(1/20)

Ⅲ．調査の結果

1．A地点の調査

1 調査概要（第2, 3図、図版1）

村下遺跡A地点は大野城市筒井1丁目498-2に所在する。調査面積は、約440㎡である。遺構面は現地表面から60～100cm下で確認され、標高は16.20mである。基本土層は調査区南側壁面の上層から、埋土36cm、耕作土26cm、東側壁面では埋土50cm、耕作土14cmである。検出された遺構は竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、土坑18基、溝5条、ピット136基である。出土遺物は整理用コンテナ14箱分で、時期は弥生時代が主体である。

2 遺構と遺物

i．竪穴住居跡

竪穴住居は3軒検出された。方形を呈するもの2軒と円形を呈するもの1軒である。

1号竪穴住居跡（第4図、図版2）

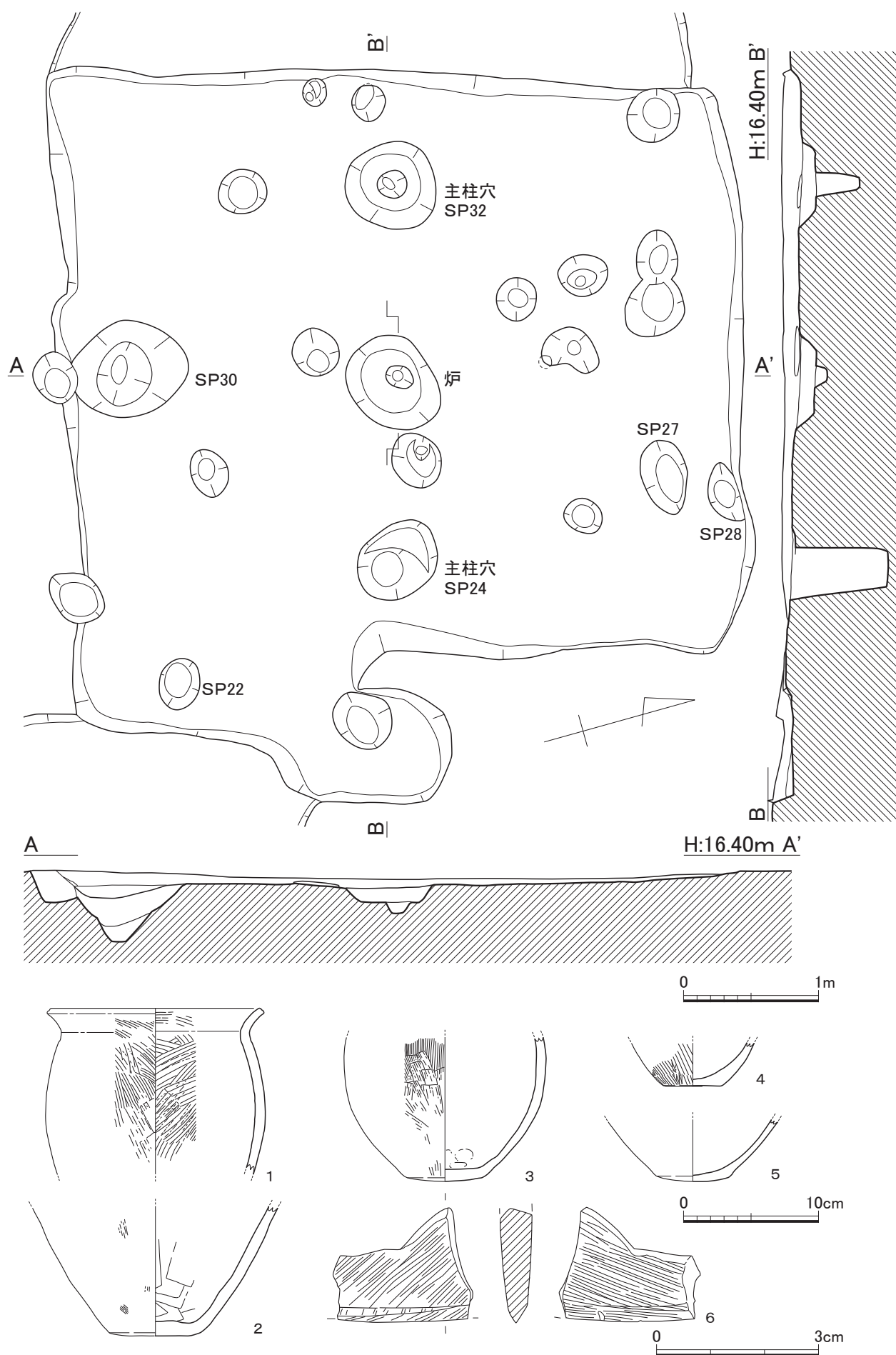
調査区の南東に位置する方形の竪穴住居跡である。西側にある4.2m×残存長1.4m、深さ10cm前後の遺構を切るが、東側のSK55との新旧関係については不明である。規模は5m×4.3mで、深さは10cm前後である。中央の60cm×75cmの楕円形ピットが炉、深さ71cmのSP24と深さ43cmのSP32が支柱穴と考えられる。また、住居内埋土中出土遺物とSP27、SP30出土遺物が接合したことからSP27、SP30も住居に付随するピットと考えられる。竪穴住居埋土中より出土した遺物はビニール袋6袋分で、弥生時代後期の甕や、壺、高杯、器台片、焼土塊14点などがある。焼土塊については住居内に存在する各ピットからも出土している。SP28から15点、その他SP30から2点、SP22から2点、SP24、27と炉から1点ずつ出土している。

出土遺物（第4図）

弥生土器

甕（1～3） 1は頸部の屈曲がゆるく、口縁部はやや外反する。復元口径16.0cm、残存器高12.3cmである。口縁部内外面にハケメを施した後、口縁部全体をヨコナデ、胴部内外面は斜方向のハケメ後胴部外面下半にナデを施している。胴部外面に黒斑がある。**2**は竪穴住居跡埋土から出土した破片に、SP27出土の破片が接合した甕である。凸レンズ状の平底で、底径6.8cm、残存器高9.6cmである。内面は底部に指頭痕が認められ、縦方向の工具によるナデが施されている。底面はナデ、胴部外面はハケメ後不定方向の工具によるナデである。胴部外面に黒斑がある。**3**は竪穴住居跡埋土から出土した破片に、SP30出土の破片が接合した甕である。復元底径5.5cm、残存器高10.7cmである。凸レンズ状の平底で、胴部との境は丸みを帯び、やや外反しながら丸みを持つ胴部へと続く。鉢の可能性もある。底部内面は指頭圧後ナデ、胴部内面は縦方向のナデ、底面はナデ、胴部外面は縦方向のハケメ後下半はヨコナデである。外面に黒斑がある。

壺（4, 5） 4は小さな平底で、内湾気味に立ち上がる胴部がつく。底径4.4cm、残存器高3.2cm



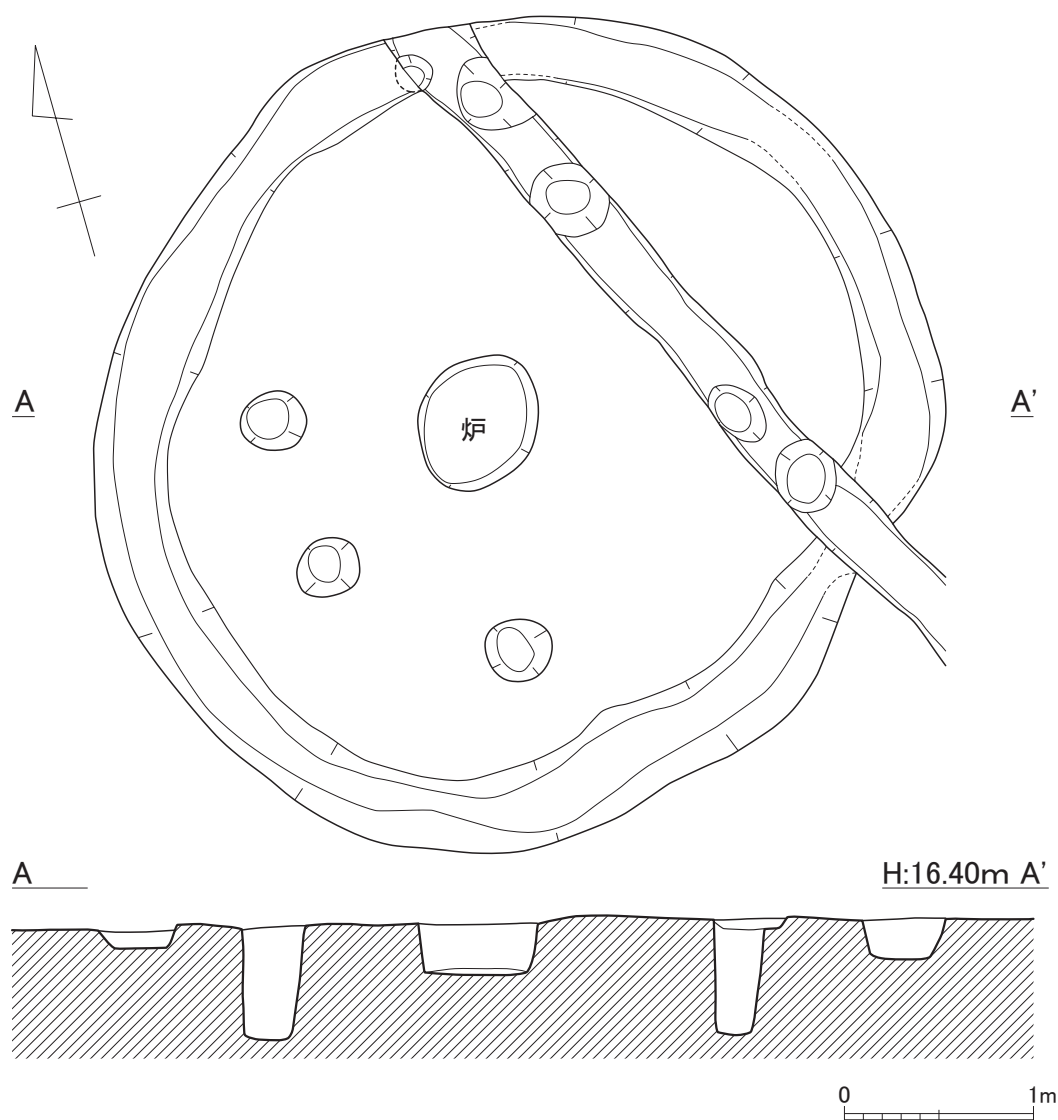
第4図 1号竖穴住居跡 実測図 (1/40) ・出土遺物実測図 (6は1/1、他は1/4)

である。内面と底面はナデ、胴部外面は縦方向のハケメである。胴部外面から底面にかけて黒斑がある。5は凸レンズ状の底部である。底径5.4cm、残存器高4.6cmである。胴部との境は丸みを帯び、やや外反しながら胴部へと続く。内面と底面はナデ、胴部外面は縦方向のナデである。

石製品（6） 6は竪穴住居跡の炉から出土した。石包丁の刃部と考えられる。残存長2.1cm、残存幅2.6cm、厚さ0.6cm、重さ3.01gである。全体は丁寧に磨かれており、一部に使用痕が認められる。輝緑凝灰岩製である。

2号竪穴住居跡（第3図）

調査区の南東側、1号竪穴住居跡の南に位置する。方形の竪穴住居跡と考えられる。北西コーナー付近が確認できたが、大半は調査区外へ展開する。検出できた規模は2.7m×3.1m、深さ10cm前後である。出土遺物はビニール袋1袋分で、弥生時代後期の甕片、複合口縁壺片、焼土塊3点、黒曜石製フレイクなどとともに、混入と考えられる瓦1点がある。いずれも小破片で図示できるものではなく、住居跡の時期を特定することは難しいが、形状と出土遺物から概ね後期と考えられる。



第5図 3号竪穴住居跡 実測図 (1/40)

3号竪穴住居跡（第5図、図版2・3）

調査区の北西側に位置する円形の竪穴住居跡で、SD 02 に切られている。円形に周る溝は住居の壁際の周溝と考えられ、規模は4.5 m×4.1 mの楕円形で、幅35～50cm、深さ10～20cmである。床面は、壁面の立ち上がりが残存しないため、ほとんど平坦である。中央の62cm×78cm、深さ26cmの楕円形ピットでは、少量であるが炭化物が見られ、炉と考えられる。床面西側の3基のピットとSD 02内ピットの内1基については、直径35cm前後、床面からの深さ60cm前後という点でピットの規模がほぼ共通しているため、いずれもこの住居跡に付随するものと判断した。出土遺物はわずかで、弥生土器の甕を含む破片が炉内から6点、周溝内から3点出土したのみで、いずれも小破片で図示できるものはないが、住居跡の形状から弥生時代の前期から中期の時期と考えられる。

ii. 掘立柱建物跡

SB 01（第3図）

調査区の中央に位置する。SB 02、SD 01 と切り合うが、新旧関係は不明である。1間×2間で、南北に長く、主軸はN-3°-Wで、西に振れている。梁行1間(平均3.38 m)、桁行2間(平均4.64 m)、床面積15.68 m²である。柱間距離は梁行が平均3.38 m、桁行が平均2.32 mである。柱穴の直径は、P 2 が62cm、P 3 が52cm、その他は40cm前後で、深さはP 6 が43cm、その他は20cm前後である。出土遺物はわずかで、P 1 とP 3 から弥生土器の破片が数点、P 2 から弥生土器と土師器杯破片が数点出土した。いずれも小破片で図示できるものはなく、掘立柱建物の時期を特定することはできない。

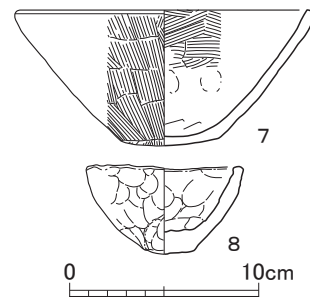
SB 02（第3図）

調査区の中央北側に位置する。SB 01 と切り合うが、新旧関係は不明である。1間×2間で、東西に長く、主軸はN-26.5°-Wで、西に振れている。梁行1間（平均3.55 m）、桁行2間（平均4.39 m）、床面積15.58 m²である。柱間距離は梁行が平均3.55 m、桁行が平均2.19 mである。柱穴の直径は、55cm～67cmで、深さはP 2 が52cm、その他は22cm～37cmである。出土遺物はわずかで、P 1 出土の2点のみ図示できた。その他は弥生土器の小破片が、P 1 から10点、P 2、P 3 から数点出土した。掘立柱建物の時期としては、弥生時代後期の可能性がある。

P 1 出土遺物（第6図、図版7）

弥生土器

鉢(7, 8) 7は凸レンズ状の底部に直線的に開く体部がつく。口径15.9cm、底径5.3cm、器高7.2cmである。内面は底部を指頭圧で整え、全体をナデ後、体部上半に横方向のハケメを施している。外面は体部が斜方向のハケメ、底面は一定方向のハケメ、口縁端部はナデで平坦に仕上げている。体部外面に黒斑がある。8はミニチュア土器の鉢である。口径8.4cm、底径2.6cm、器高4.7cmである。手捏ねで作られており、全体がナデで仕上げられているが、指頭痕が著しく残る。外面に黒斑がある。ほぼ完形である。



第6図 SB02 P1出土遺物実測図(1/4)

iii . 土坑

SK 14 (第3図、図版2)

調査区の西側、3号竪穴住居跡のすぐ南西に位置する。別の土坑と切りあっているが、新旧関係は不明である。2.0 m×0.8 mの楕円形で、深さは南側が48cm、北に向かって20cmほど深くなり、最深部では、66cmである。出土遺物は図示できた甕4点の他、弥生時代の逆L字状や如意形口縁の甕、壺片などビニール袋2袋分の遺物がある。

出土遺物 (第7図)

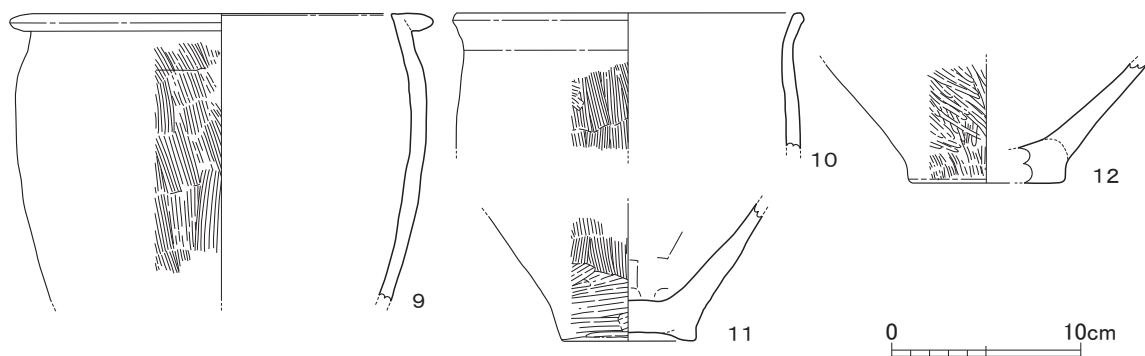
弥生土器

甕 (9～11) 9は平坦な口縁部を持つ甕である。復元口径22.4cm、残存器高15.2cmである。内面は縦方向のナデ、胴部外面は縦方向のハケメ、口縁部上面の平坦部は横方向のハケメ、口縁端部から頸部にかけては、ヨコナデである。胴部外面に黒斑がある。10は如意形口縁を持つ甕である。復元口径18.6cm、残存器高7.3cmである。口縁形状の歪みが大きい部分の破片であり、口縁部はもう少し外反する可能性もある。内面はナデ、胴部外面は縦方向のハケメで、口縁部外面から端部内面までをヨコナデで仕上げている。11は上げ底の底部である。底径7.1cm、残存器高7.3cmである。底部内面には指頭痕が残り、胴部内面は工具によるナデである。胴部外面は縦方向のハケメ後、上げ底状の底部外面と底面を丁寧にナデており、一部にヘラミガキのような単位と光沢が認められる。胴部内面の残存部の端には、煮炊きの結果か、赤黒く変色している部分がある。

壺 (12) 12は平底の底部である。復元底径8.3cm、残存器高6.3cmである。内面はヨコナデ、外面は胴部下位に縦方向のハケメ後、胴部中位から下位に縦から斜方向のヘラミガキ、底面はナデである。

SK 16 (第3図、図版3・4)

調査区の北に位置し、調査区外へ展開する。北西側を別の土坑に切られている。4.0 m×2.8 mの方形部分に、3.6 m×1.7 mの楕円形部分がついたような形である。深さは方形部分で20～36cm、楕円形部分は東側では27cmだが、南に向かって下がっていき、最深部では48cmである。出土遺物は図示できた24点の他、ビニール袋13袋分で、楕円形部分からの出土が多かった。混入と考えられる須恵器片、土師器片、瓦をわずかに含むが、ほとんどは、前期末から中期初頭の弥生土器片で、黒曜石やサヌカイトのフレイク、被熱の可能性がある赤色化した礫を少量含んでいる。また、焼土塊は54点出土していて、主に楕円形部分からである。



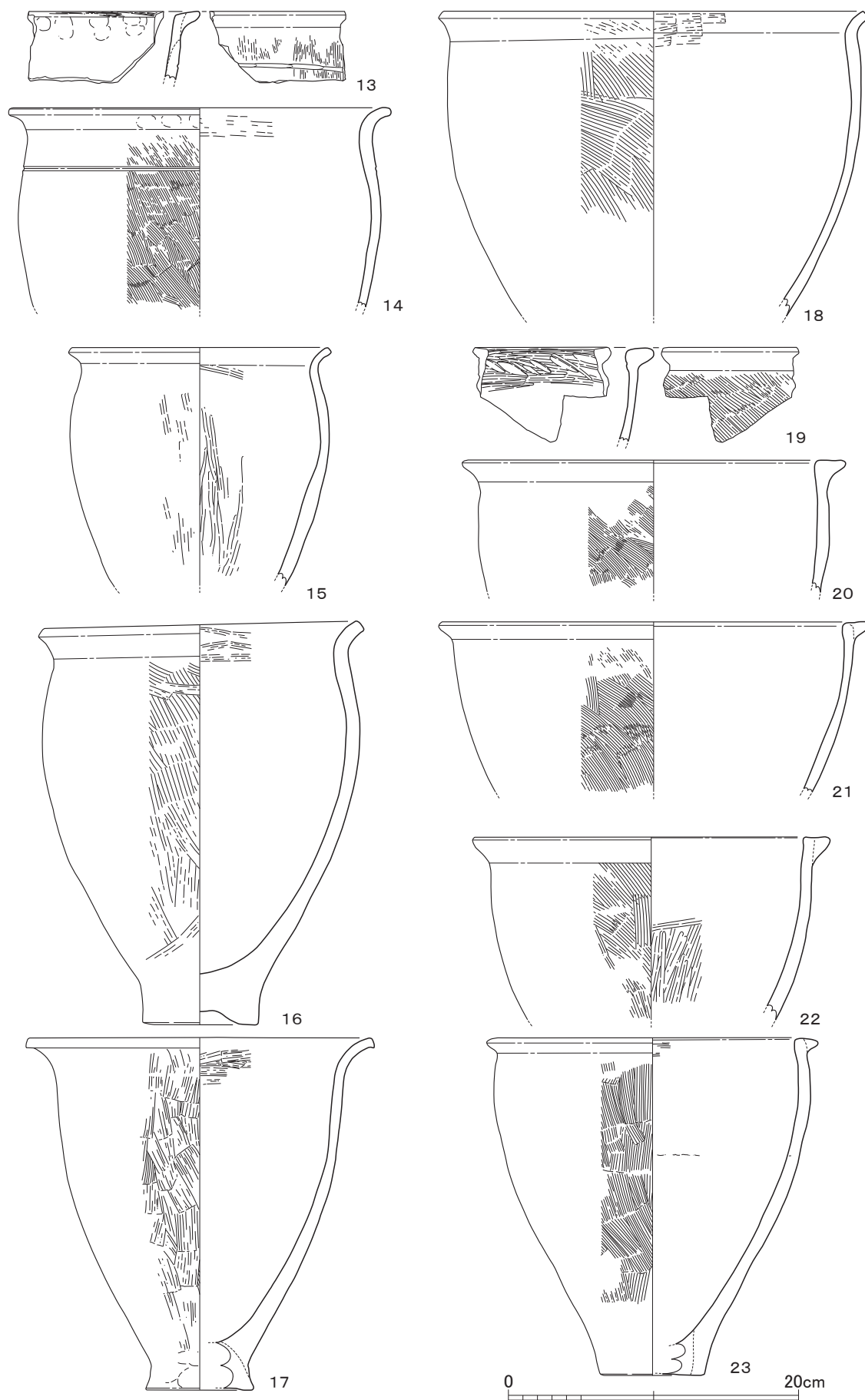
第7図 SK14 出土遺物実測図(1/4)

出土遺物（第8～10図、図版7・8）

弥生土器

甕（13～31） 口縁部が如意形に外反するもの（13～18）と平坦なもの（19～24）とに分けられる。

13は楕円形部分から出土した。平坦な面を持つ如意形口縁である。残存器高 4.9cm である。口縁部下に沈線を 1 条めぐらせる。口縁部内面上位には指頭痕が残り、外面に縦方向のハケメを施した後、口縁部全体をヨコナデで仕上げ、口縁部平坦面に横方向のハケメを施す。14は口縁端部が丸い。復元口径 26.3cm、残存器高 13.8cm である。口縁部下に沈線を 1 条めぐらせる。胴部内面はナデ、口縁部内面には横方向のハケメのような痕跡が残り、外面に指頭痕が確認できる。胴部外面は斜方向のハケメ後ナデ、口縁部は沈線下までヨコナデで仕上げられている。15は楕円形部分から出土した。比較的小型の如意形口縁の甕である。復元口径 18.1cm、残存器高 16.4cm である。胴部内面はナデ後縦方向にヘラミガキのような単位と光沢が認められる。胴部外面は縦方向のハケメ後ナデ、頸部内面は横方向のハケメ、その後口縁部内外面はヨコナデで仕上げている。外面に黒斑がある。16は厚手の如意形口縁の甕で、口縁端部は平坦である。底部は上げ底で、ほぼ直立する。口径 22.4cm、器高 27.3～27.8cm である。口縁部内面は横方向のハケメ後、内外面をヨコナデ。胴部内面は斜方向のナデであるが、下半は磨耗のため不明瞭である。胴部外面は縦方向のハケメ後下位に横方向のハケメ。上げ底状の底部外面はヨコナデ、底面はナデである。胴部外面には黒斑があり、煤の付着が見られる。17は緩やかに外反する如意形口縁の甕である。底部端部は外側へ張り出す。復元口径 24.0cm、器高 24.3cm である。やや上げ底気味の底部外面には指頭痕が残り、ヨコナデを施されており、底面はナデである。胴部内面はナデ、頸部内面は横方向のハケメ、胴部外面は縦方向のハケメを口縁端部まで行ない、その後口縁端部をヨコナデで平坦に仕上げている。胴部外面に黒斑がある。18は楕円形部分から出土した。如意形口縁で、口縁端部が平坦である。口径 29.6cm、残存器高 21.0cm である。胴部内面は磨耗のため調整不明瞭であるが、頸部内面は横方向のハケメ、胴部外面は斜方向のハケメが口縁端部まで施された後口縁部内外面をヨコナデで仕上げている。19は楕円形部分から出土した。丸みを持つ平坦な口縁部である。残存器高 6.5cm である。内面は横方向のヘラミガキで、最上部に工具痕が周る。外面は斜方向のハケメで、口縁平坦面と外面をヨコナデで仕上げる。20は口縁部の平坦面がほぼ水平である。復元口径 26.4cm、残存器高 9.1cm である。内面は磨耗のため調整不明瞭であるが、胴部外面に斜方向のハケメ後、口縁部平坦面と外面をヨコナデで仕上げている。外面に黒斑がある。21は楕円形部分から出土した。口縁部平坦面がやや内傾している。復元口径 29.6cm、残存器高 11.7cm である。内面は磨耗のため調整不明瞭であるが、胴部外面は斜方向のハケメ後口縁部内外面をヨコナデで仕上げている。口縁部平坦面に黒斑がある。22は口縁部の平坦面がほぼ水平である。復元口径 24.6cm、残存器高 12.6cm である。内面は丁寧なナデで、下半の一部には縦方向にヘラミガキのような単位と光沢が認められ、上半は不定方向のナデである。外面は斜方向のハケメ後に口縁部内外面をヨコナデで仕上げている。23は丸みを帯びた平坦な口縁の甕である。復元口径 22.8cm、復元底径 7.2cm、器高 23.3cm である。やや上げ底気味の底面から底部外面にかけてはナデである。胴部内面はナデで、不明瞭ではあるが指頭痕が残り、口縁部内側は一部に横方向のハケメが残る。外面に縦方向のハケメを施した後、口縁部内面から外



第8図 SK16 出土遺物実測図①(1/4)

面をヨコナデで仕上げている。外面に黒斑があり、一部に煤が付着している。内面は煮沸のためか黒色に変色している。**24**は口縁平坦面がややくぼむ小型の甕である。上げ底で、底部端部は外側へ張り出す。口径 15.1cm、復元底径 6.6cm、器高 19.7cm である。底面はかなり雑なナデで、指頭痕が残る。胴部内面は下半がナデ、上半は丁寧にナデしており、一部に縦方向のヘラミガキのような単位と光沢が認められる。胴部外面は縦方向のハケメを施した後、口縁部をヨコナデで仕上げる。口縁部の調整はかなり雑で、工具によるヨコナデであるが、余分な粘土が口縁部外面にはみ出している。口縁部内面に黒斑がある。**25**～**29**は甕の底部である。**25**はやや上げ底気味の底部である。底径 7.4cm、残存器高 12.2cm である。底部と胴部の境は不明瞭である。内面は磨耗のため調整不明であるが、底面はナデ、胴部外面は縦方向のハケメである。**26**はやや上げ底気味の平底である。底径 8.9cm、残存器高 11.3cm である。底部内面は磨耗のため調整不明、胴部内面はナデである。胴部外面に縦方向のハケメを施した後、下位に横方向のハケメを施す。その後胴部下位と底面は丁寧にナデで、一部にヘラミガキのような単位と光沢が認められる。底面に黒斑がある。**27**は楕円形部分からの出土で、底部端部が外側へ張り出すやや上げ底の甕である。復元底径 8.4cm、残存器高 7.7cm である。内面と底面はナデ、胴部外面に縦方向のハケメを施した後、下位はヨコナデである。**28**は上げ底の底部で、やや外反しながら胴部へ続く。復元底径 7.8cm、残存器高 7.9cm である。内面はナデ、底部外面から底面は指頭圧後ナデで、胴部外面は縦方向のハケメである。**29**は底部端部が外側へ丸く張り出す上げ底である。底径 8.9cm、残存器高 13.9cm である。内面と底面はナデ、胴部から底部外面は縦方向のハケメである。内面は煮沸のためか黒色に変色している。**30**は復元口径 35.5cm、残存器高 25.7cm である。平坦な口縁部の下に三角突帯を 1 条めぐらす。胴部内面の下半は縦方向のナデ、上半は横方向のナデである。胴部外面は縦方向のハケメ、口縁平坦面から突帯の下位まではヨコナデである。内外面に黒斑がある。**31**は上げ底気味の底部を持つ。底面はナデ、胴部外面に縦方向のナデを施した後、胴部下位にヨコナデを施す。内面は下半が縦方向のナデで、中位はヨコナデである。胴部下半の内面には、直径 0.4～2 cm ほどのクレイター状の窪みが無数にある。外面に黒斑が 2 ヶ所ある。

壺 (32～34) **32**は楕円形部分から出土した。胴部から頸部へなだらかに続く壺である。残存器高 9.3cm である。胴部内面は横方向の工具によるナデ、外面は縦方向のハケメ後縦方向のナデを施した後、ヘラミガキを行っている。頸部内面はナデ、外面は横方向のナデである。**33**は楕円形部分から出土した。頸部がしまり、口縁部が大きく外反する壺である。胴部と頸部の境に三角突帯を 1 条めぐらす。復元口径 18.1cm、残存器高 22.2cm である。胴部内面はナデで工具痕が残る。外面は、口縁部下位から頸部外面に縦方向のハケメを施した後、口縁部から頸部内外面をヨコナデで仕上げ、更に、突帯貼付後に周辺を横方向に丁寧にナデしており、一部に光沢が認められる。胴部外面は斜方向のヘラミガキ、突帯以下胴部との境までは横方向のヘラミガキである。口縁部と頸部内外面はヨコナデで仕上げている。外面に黒斑がある。**34**は楕円形部分から出土した。残存器高 15.3cm である。胴部内面はナデであるが、指頭痕が顕著に残り、上位に粘土接合痕が認められる。外面はハケメ後横方向のヘラミガキで、頸部との境はヨコナデ後ヘラミガキである。

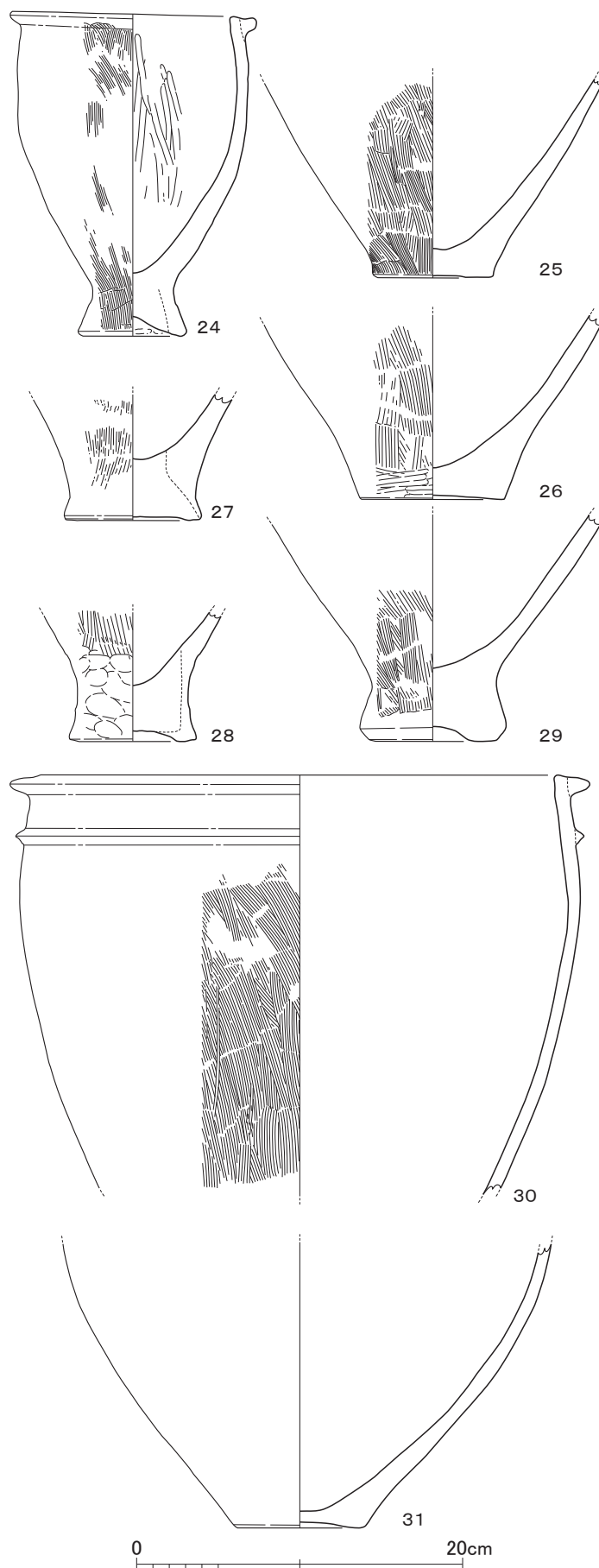
須恵器 (35) **35**は杯である。復元口径 13.2cm、底径 8.4cm、器高 3.7cm である。器面は磨耗して

いるが、底面は回転ヘラ切り、他は回転ナデである。

瓦 (36) 36は楕円形部分から出土した。丸瓦の破片である。残存長6.1cm、残存幅9.7cm、厚さ1.7cmである。凹面に布目痕が残る。

SK 17 (第11図、図版4・5)

調査区の中央東よりに位置する。4.18 m × 1.76 mの南北に長い隅丸長方形で、深さは北側が63cm、中央から南側は下がっており、85cmである。南側中央の底面からは直径44cm、深さ59cmのピットが1基検出された。出土遺物は多数あり、一個体ずつのグループが認識できる状態であったが、一定のレベルからの出土ではなく、埋土上位から底面近くまで広がっている。遺構中央付近での土層観察では、以下のように3層に分けられる。Ⅰ層：厚さ64cmで、黒褐色土。意識的に砕いたような径1～2cmの土器の細片を含む。Ⅱ層：厚さ32cm。灰褐色土。Ⅲ層：厚さ34cm。黒色土。土器が特に多い。出土遺物は図示できた13点の他、焼土塊235点とビニール袋12袋分である。弥生土器の甕、壺の底部13点、被熱の可能性がある赤色化した礫、黒曜石やサヌカイトの剥片16点、サヌカイトのスクレーパー1点、土師器片1点などであり、ほとんどが前期末から中期初頭の弥生土器の破片であった。なお、サヌカイトのスクレーパーについては、不定形の小型剥片の一侧辺にブランディング状の細かい剥離を加えて刃部を作り出



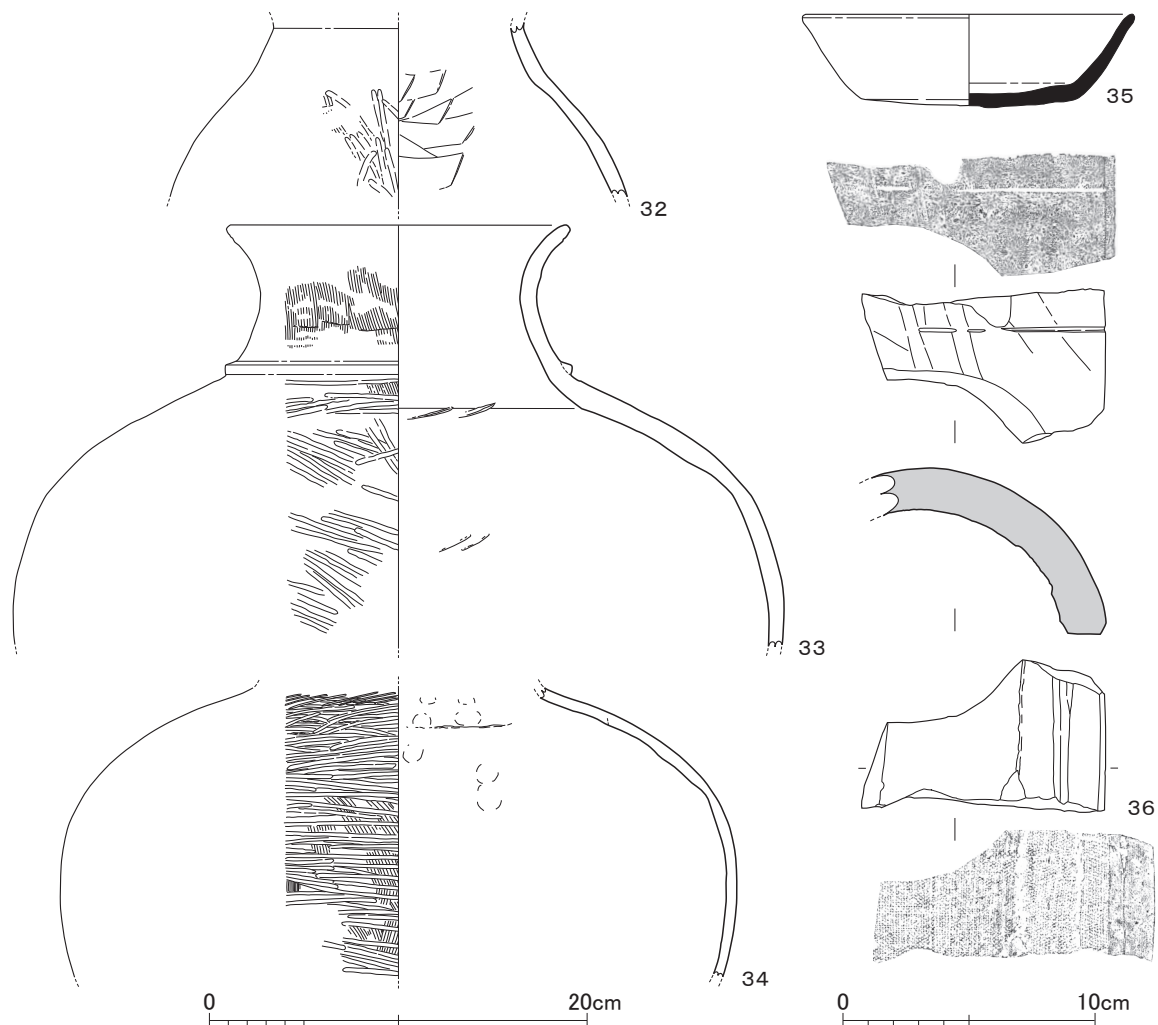
第9図 SK16 出土遺物実測図②(1/4)

しているもので、旧石器時代か縄文時代かは不明である。

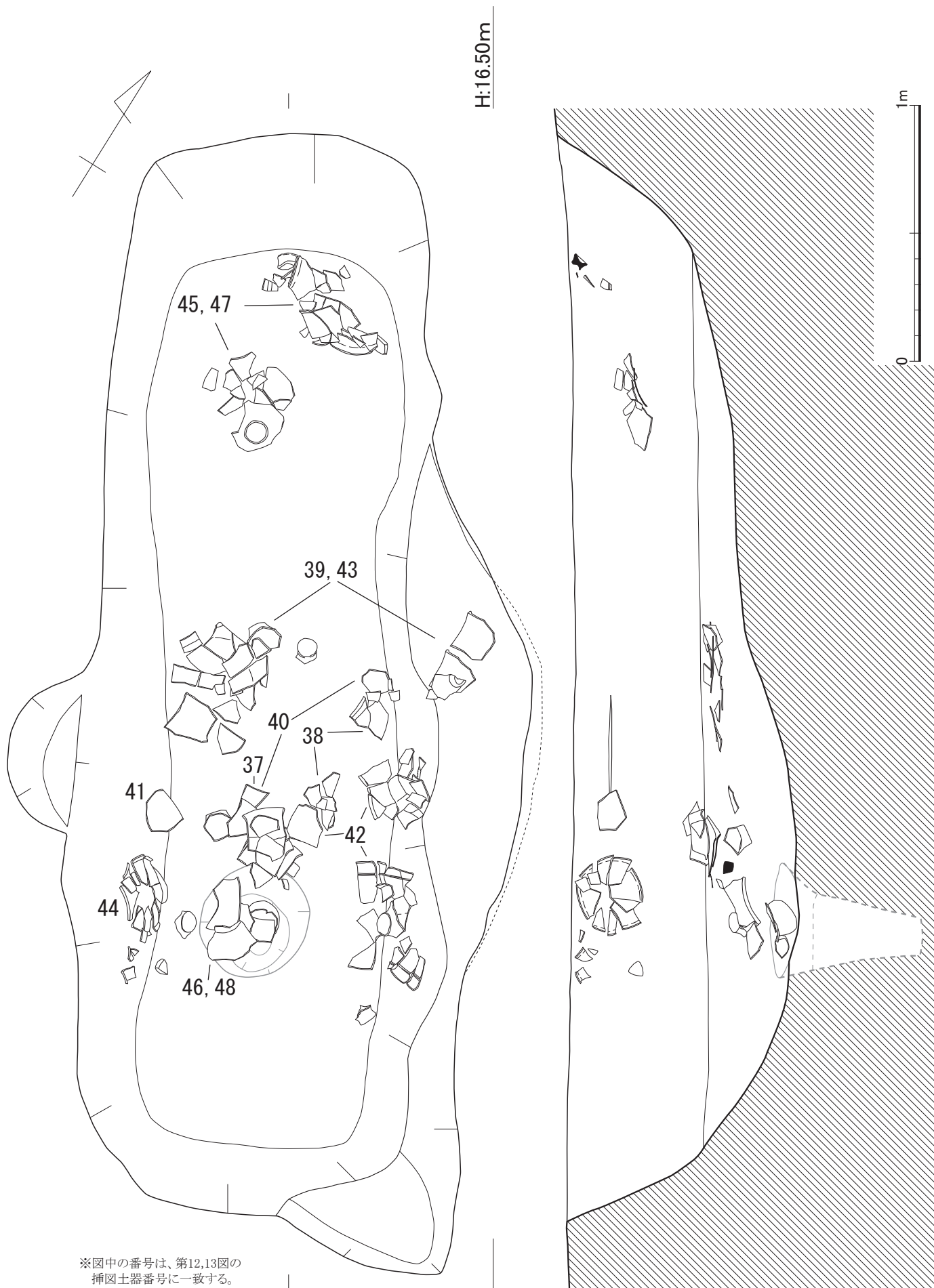
出土遺物（第12・13図、図版8・9）

弥生土器

甕（37～44） 37～42は如意形口縁、43・44は平坦な口縁の甕である。37は端部下端に細かい刻目を持ち、口縁部下に沈線を1条めぐらせる。口径25.8cm、残存器高22.5cmである。口縁部外面と胴部上位内面に指頭痕が残る。胴部内面は磨耗のため調整不明瞭であるがナデと考えられ、口縁部内面は横方向のハケメ、外面は全体に縦方向のハケメ。その後口縁部内外面にヨコナデを施す。胴部外面に黒斑がある。38は口縁端部が角張り、口縁部下に沈線を1条めぐらす。口径25.4cm、残存器高22.5cmである。頸部から胴部内面はナデで、頸部内面は指頭痕が残る、口縁部内面は横方向のハケメである。頸部から胴部外面に斜方向のハケメを施した後、口縁部外面に縦方向のハケメ。その後口縁部内外面はヨコナデである。外面に黒斑がある。39は口縁部下に1条の沈線をめぐらす。口径26.3cm、残存器高26.9cmである。頸部から胴部内面は丁寧な斜方向のナデ後、胴部内面には縦方向にまばらにヘラミガキのような単位と光沢が認められる。頸部から胴部外面は縦、斜方向のハケメ、口縁部内外面はヨコナデである。胴部外面に黒斑がある。40は口縁部下に三角突帯を1条めぐらし、底部端部が外側へ張り出す上げ底である。復元口径26.0cm、底径6.9cm、器



第10図 SK16 出土遺物実測図③(35・36は1/3、他は1/4)

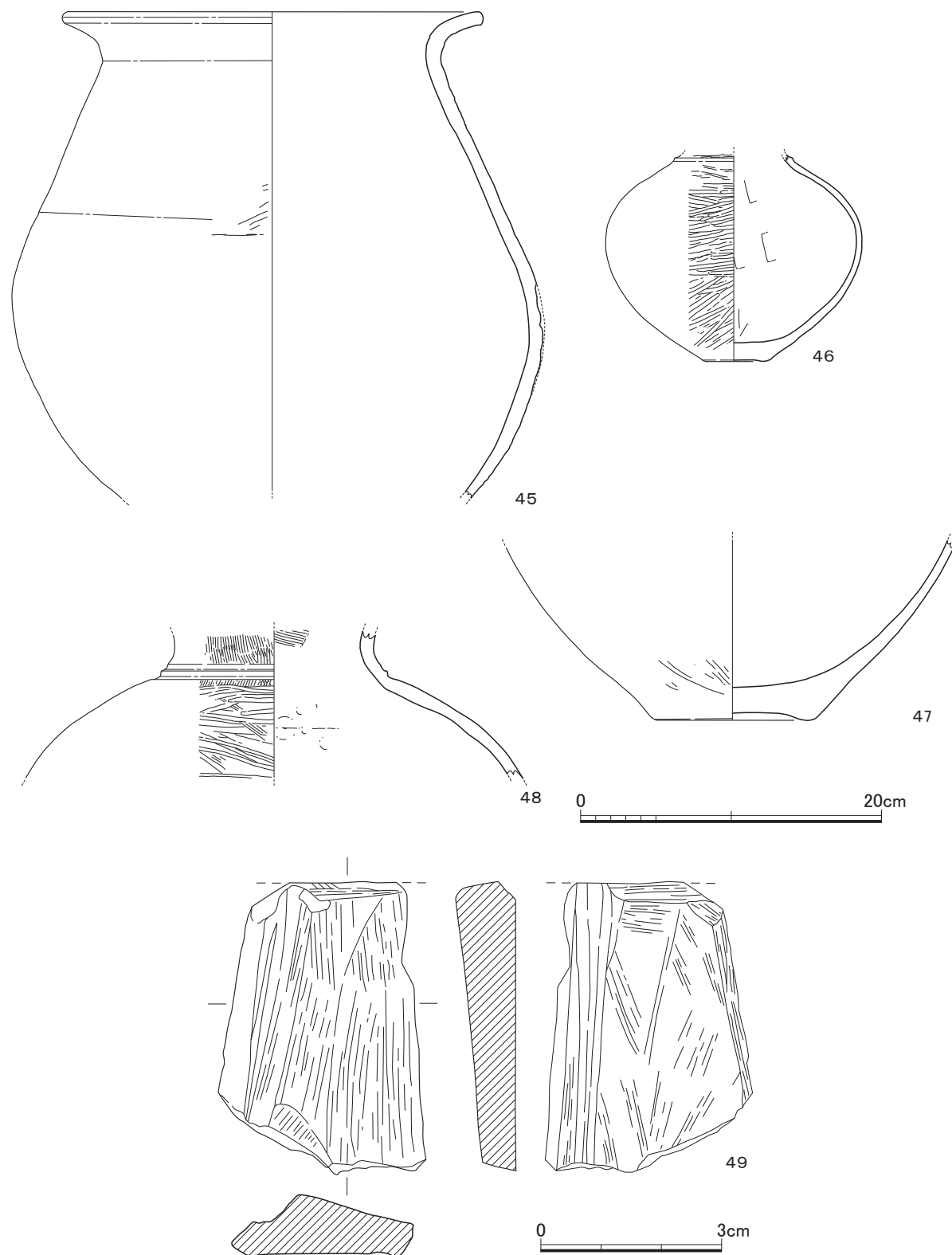


第11図 SK17 実測図(1/20)



第12図 SK17 出土遺物実測図①(1/4)

高 29.4 ～ 30.0cm である。頸部から胴部内面はナデ、底面は指頭痕が残り、かなり雑な調整で、上げ底状の底部外面はナデ、胴部外面は縦方向のハケメ、口縁部内外面から突帯下部まではヨコナデである。胴部外面に黒斑がある。41 は復元口径 26.4cm、残存器高 14.0cm である。胴部内面は指頭痕が残り、ナデである。頸部内面は横方向のハケメ、胴部外面は斜方向のハケメ後胴部下半をナデ、



第13図 SK17 出土遺物実測図②(49は1/1、他は1/4)

頸部外面に縦方向のハケメを施した後、口縁部内外面から頸部までをヨコナデで仕上げる。**42**は丸みを帯びた如意形口縁で、底部端部も丸みを持って外側へ張り出す上げ底である。口径 26.0cm、底径 8.6cm、器高 31.2～31.5cm である。内面は胴部がナデ、口縁部は横方向のハケメである。外面は胴部から上げ底状の底部外面まで縦方向のハケメを施した後、底部外面から底面をナデている。口縁端部と外面はヨコナデである。内面に黒斑がある。**43**は丸みを持った平坦口縁である。口径 25.6cm、残存器高 21.4cm である。胴部内面は磨耗のため調整不明瞭である。口縁部の粘土貼付のための指頭痕が口縁部内面と外面に残る。口縁部から頸部内面はナデ、胴部外面は縦方向のハケメ後、下半は縦方向にまばらにヘラミガキのような単位と光沢が認められる。頸部外面は横方向のハケメ、口縁部上面から外面はヨコナデで仕上げる。胴部外面に 2ヶ所の黒斑がある。**44**は平坦な口縁部で、内側につまみ出している。口径 27.2cm、残存器高 11.3cm である。口縁部の粘土貼付のための指頭痕が口縁部内面と外面に残る。胴部内面は工具ナデ後、一部に縦方向のヘラミガキのような単位と光沢が認められる。外面は斜方向のハケメ、口縁部内外面はヨコナデである。内面には煮沸の結果によるものか黒色に変化した部分が周る。外面に黒斑がある。

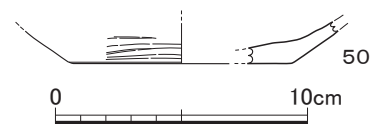
壺 (45～48) **45**は口縁部が強く外反し、頸部と胴部の境は不明瞭である。口径 28.0cm、残存器高 32.3cm である。内外面とも磨耗や剥離のため調整不明瞭であるが、頸部と胴部の境の辺りにはヘラミガキが残り、一部に粘土接合痕が確認できる。内外面に黒斑がある。**46**は頸部に 1 条の三角突帯をめぐらす小型の壺である。底径 4.5cm、残存器高 13.7cm である。調整は丁寧で、内面は工具によるナデ、底面がナデ。胴部外面は横方向のヘラミガキである。外面に黒斑がある。**47**はやや上げ底の底部である。底径 10.0cm、残存器高 12.0cm である。内面はナデ、外面は磨耗のため調整不明瞭であるが、胴部下位に部分的に斜方向のヘラミガキの痕跡が残る。**48**は頸部に 1 条の三角突帯をめぐらす。残存器高 9.8cm である。頸部内面は横方向のハケメ、頸部と胴部の境から下位は指頭痕が残り、ナデで、粘土接合痕が観察できる。頸部外面から胴部との境には縦方向のハケメを施し、その後三角突帯をヨコナデで貼付する。胴部外面は横方向のヘラミガキである。

石製品 (49) **49**は砥石の破片である。長さ 4.85cm、幅 3.4cm、厚さ 1.0cm である。表面には推定幅約 1cm になると考えられる深さ 5mm ほどの溝状の凹みがあり、裏面にも幅 6mm、深さ 2mm ほどの同様な窪みが見られる。全体に擦痕が観察できる。砂岩製である。

焼土塊 (図版 10) 235 点出土した。長さが 4cm 未満のものが 197 点、4cm 以上のものが 38 点である。全体に凹凸があり、指でナデたような幅 2cm、長さ 3cm ほどの溝状の凹みや、植物の茎の痕跡かと思える縦の筋が入る幅 3mm ほどの凹みが多数存在する。

SK 55 (第 3 図)

調査区の南東に位置し、調査区外へ広がる。1 号竪穴住居跡と切りあっているが、新旧関係は不明である。長径 2.5 m、短径 1.16 m、深さ 0.15 m の楕円形であろうと考えら



第14図 SK55 出土遺物実測図(1/3)

れる。底面北側に直径 66cm、深さ約 70cm のピットがあり、その埋土からは弥生土器の鉢片など 2 点が出土しているが、SK 55 に伴うピットかどうかは不明である。出土遺物は図示できた 1 点の他は、弥生時代の甕片、高杯片など、11 点である。

出土遺物（第 14 図）

土師器

杯（50） 50 は復元底径 8.6cm、残存器高 1.7cm である。内面は底部が回転ナデ後一定方向のナデ、体部はヘラミガキかと思える。底面を回転ヘラケズリ後、体部外面に横方向のヘラミガキを施す。

iv . 溝

出土遺物が少数で、時期幅が広いことから、いずれも、遺構の時期は特定できなかった。

SD 01（第 3 図）

調査区の南側に位置し、南西－北東方向へ走行する溝である。SD 02 を切り、SB 01 とも切りあうが、SD 01 との新旧関係は不明である。幅 30 ～ 80cm で、検出長 16.5 m、深さは最深部でも 6 cm である。底面の比高差は 5.5cm で、南西側が高く、北東側が低い。出土遺物はビニール袋 1 袋で、弥生土器片、土師器片、須恵器片、瓦片、肥前磁器片などがある。

SD 02（第 3 図）

調査区の西側に位置し、北西－南東方向に走行する溝である。SD 01 に切られ、3 号竪穴住居跡を切る。幅 30 ～ 40cm で、検出長 12.8 m、深さは最深部でも 9 cm である。底面の比高差は 4 cm で、北西側が高く、南東側が低い。出土遺物は弥生土器甕片、須恵器杯片、土師器片など 4 点がある。

SD 03（第 3 図、図版 1）

調査区の東側に位置する。SD 01 と同様に、南西－北東方向へ走行する溝である。SD 04 を切る。幅 28 ～ 84cm で、検出長 14.7 m、深さは最深部で 10cm である。底面の比高差は 4 cm 前後であるが、高い部分と低い部分が交互にあり、全体の傾向がつかめない。出土遺物はビニール袋 2 袋分で、弥生土器片、須恵器片、土師器片、黒曜石フレイク 3 点、焼土塊 1 点などである。

SD 04（第 3 図）

調査区中央に位置する。SD 02 と同様に、北西－南東方向に走行する溝である。SD 03 に切られ、南側で土坑を切る。北側でやや右方向にカーブしている。幅 26 ～ 80cm で、検出長 13.8 m、深さは最深部で 18.5cm である。底面の比高差は 13cm で、北西側が高く、南東側が低い。出土遺物はビニール袋 1 袋分で、弥生土器の甕片、須恵器片、土師器杯、高杯片などがある。

SD 05（第 3 図）

調査区中央の SD 04 と SK 17 の間に位置する。幅 32 ～ 50cm で、検出長 2.38 m、深さは 2 ～ 3 cm である。出土遺物は弥生土器 2 片と不明破片 2 点のみである。

2. B地点の調査

1 調査概要（第2・15図、図版6）

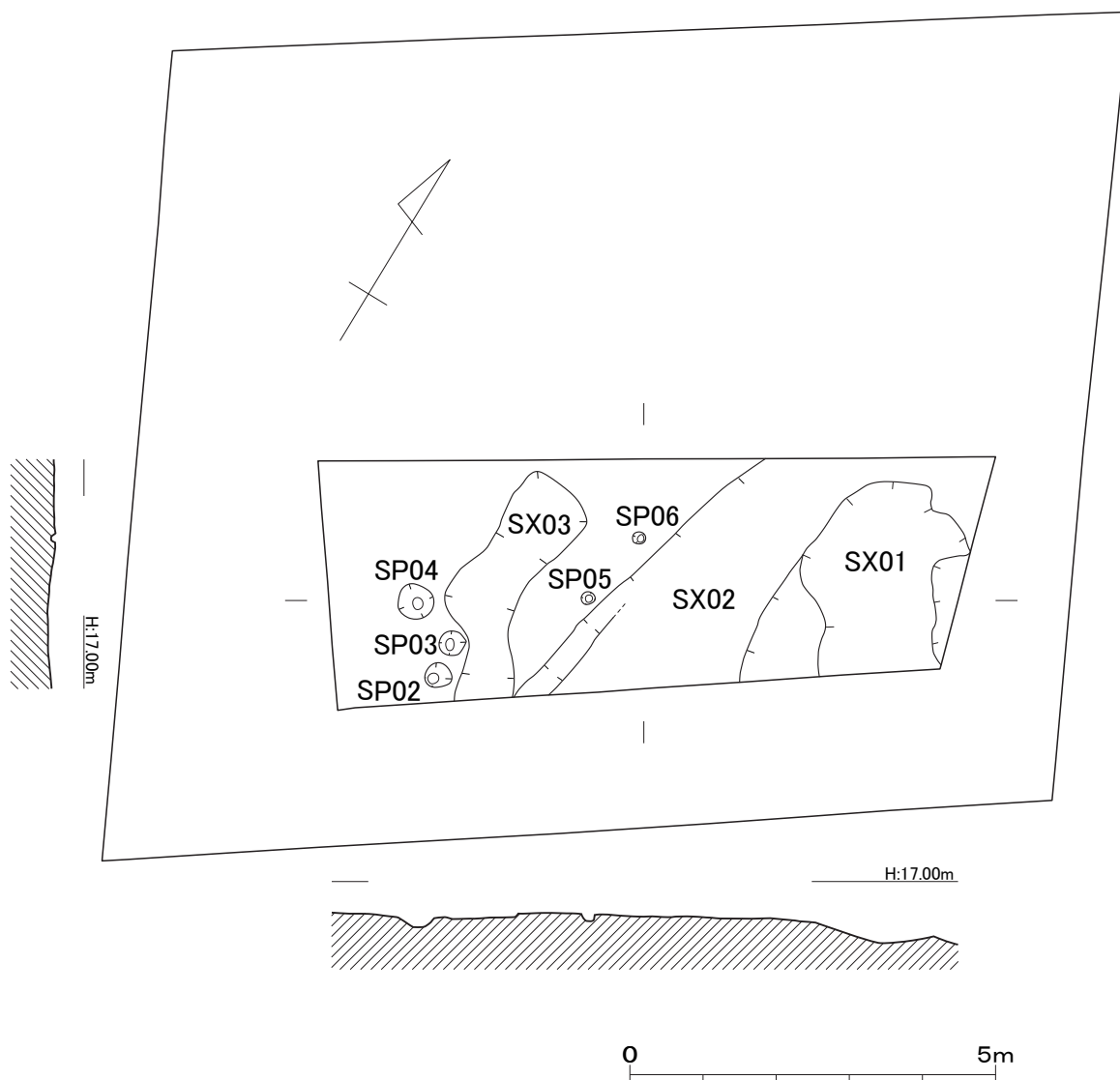
村下遺跡B地点は大野城市筒井1丁目747-4に所在する。調査面積は約30㎡である。遺構面は、現地表面から105cm下で確認され、標高は約16.50mである。なお、基本土層は、上層から、盛土70cm、旧耕作土20cm、包含層15cmである。検出された遺構は、不整形の浅い落ち込みやピットであり、新旧関係については不明である。出土遺物は整理用コンテナ5箱分で、時期は弥生時代後期が主体である。

2 遺構と遺物

i. 性格不明遺構

SX01（第15図、図版6）

調査区の東側に位置する。2.60m×2.25mの不整形を呈し、深さは26cm前後である。底面にはかなり凹凸が見られる。埋土は、黒色粘質土であるが、自然堆積と考えられる。出土遺物はビニー



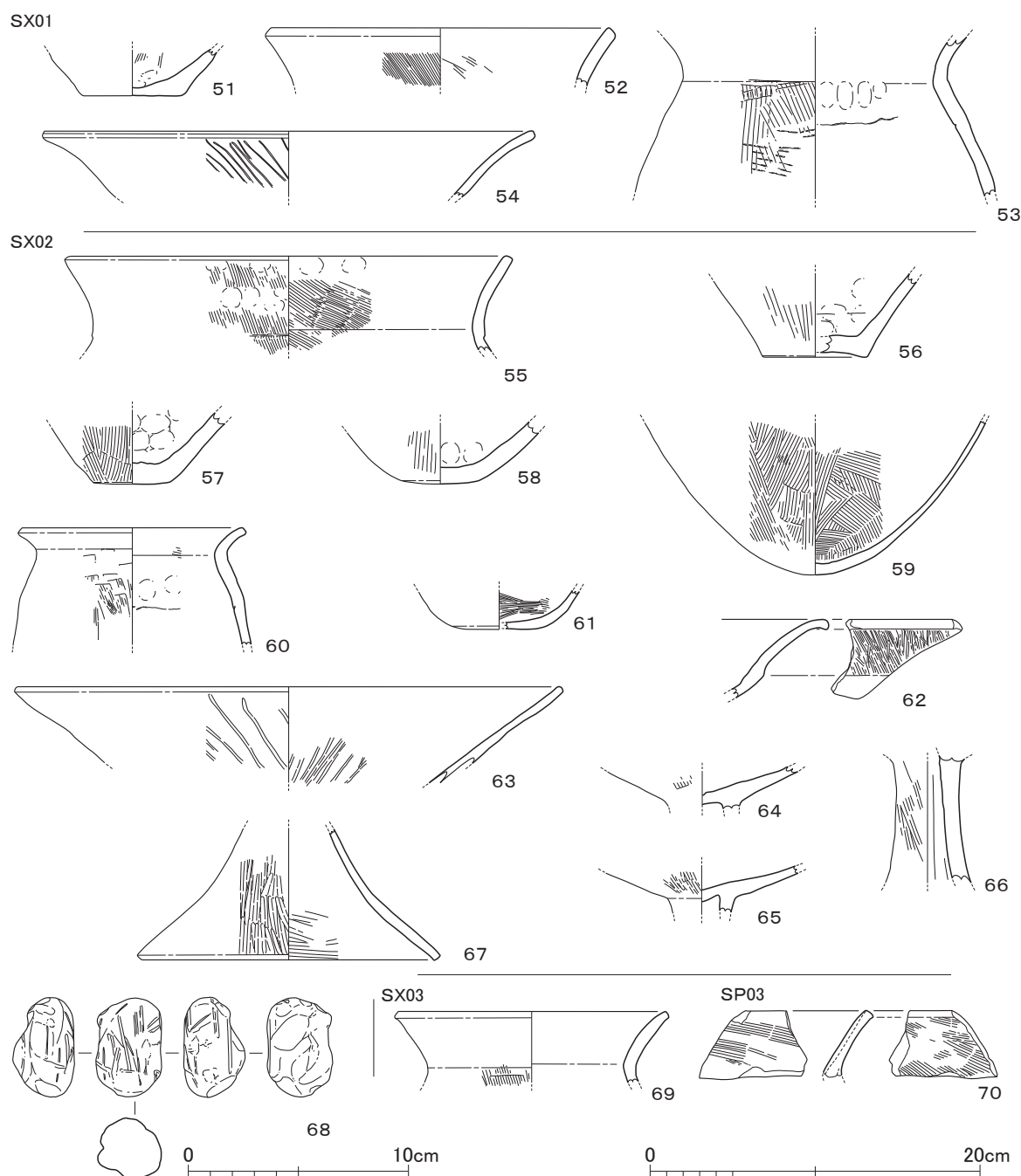
第15図 村下遺跡B地点 遺構配置図(1/100)

ル袋3袋分で、弥生時代後期の甕、壺、高杯片が主体を占める。

出土遺物（第16図）

甕(51) 51は平底の底部で、復元底径6.0cm、残存器高2.6cmである。底部中央は薄く、内面には指頭痕が認められる。器面は磨耗のため調整不明瞭であるが、内面に一部ハケメの痕跡が残し、外面はナデと考えられる。

壺(52・53) 52は立ち上がり気味にやや開く口縁部である。復元口径21.2cm、残存器高3.5cmである。内外面とも斜方向のハケメ後ヨコナデ。内面にも一部ハケメが残る。53は広口壺で、残存器高9.7cmである。口縁部内外面はヨコナデ、頸部内面は指頭痕が認められ、胴部内面はナデで、粘土接合痕が残る。胴部外面には縦方向のハケメが施され、部分的にタタキのような痕跡が確認できる。



第16図 村下遺跡B地点 出土遺物実測図(68は1/3、他は1/4)

高杯 (54) 54 は弱く外反しながら、長くのびて大きく開く杯部で、復元口径 29.8cm、残存器高 4.0cm である。内外面ともヨコナデ後、外面に暗文風のヘラミガキを施す。外面に黒斑が見られる。

S X 02 (第 15 図)

調査区の中央から、調査区外へ展開する。3.85 + α m × 1.70 + α m の不整形を呈し、深さは 14cm 前後で比較的浅い。出土遺物はビニール袋 11 袋分で、弥生時代後期の甕、壺、高杯片が主体を占めるが、わずかに弥生時代中期の可能性がある赤彩の甕の突帯部分や袋状口縁部の破片とともに土師器の杯片の混入も見られた。

出土遺物 (第 16 図、図版 9・10)

甕 (55 ~ 60) 55 は口縁部が長く、緩やかに外反する甕で、復元口径 27.2cm、残存器高 5.8cm である。内外面に指頭痕が残り、外面に縦方向、内面に斜方向のハケメを施した後、口縁端部周辺にヨコナデを施す。56 はやや上げ底を呈する甕の底部で、底径 6.2cm、残存器高 5.1cm である。内面はナデで、指頭痕と粘土接合痕が残る。胴部外面は縦方向のヘラミガキ、底面はナデである。外面全体に赤彩の痕跡が認められる。57 はやや丸みを帯びた凸レンズ状の底部で、底径 4.6cm、残存器高 4.3cm である。内面のナデは雑で、指頭痕による凹凸が著しい。外面は縦方向のハケメが施されており、底面はナデである。58 は丸底で、底径 4.6cm、残存器高 3.8cm である。内面は 57 と同様に雑なナデで、指頭痕による凹凸が目立つ。外面は磨耗のため調整が不明瞭であるが、胴部の一部や底面にハケメが認められる。59 は尖り気味の丸底で、残存器高 9.3cm である。内面と胴部外面に斜方向のハケメを施した後、底面をナデで調整している。外面の一部に煤が付着する。60 は小型の甕で、復元口径 13.8cm、残存器高 7.1cm である。外面は胴部に縦方向のハケメを施した後口縁端部までをヨコナデ、内面は磨耗のため調整不明瞭であるが、頸部に横方向のハケメが一部残存し、胴部には指頭痕と粘土接合痕が残る。

鉢 (61) 61 は丸みを帯びた平底の底部で、復元底径 5.6cm、残存器高 2.4cm である。体部内面には横方向のハケメを施し、底部内面と外面全体はナデである。

高杯 (62 ~ 67) 62 は杯部中位に稜線を持ち、口縁部が外反する。残存器高 4.8cm である。内面と外面の杯部下半はナデ、杯部上半から口縁端部はヨコナデ後縦方向のヘラミガキである。63 は杯部上半で、復元口径 33.2cm、残存器高 6.0cm である。内外面ともナデで、内面下方と外面に縦方向の粗いヘラミガキが確認できる。口縁部に沿って黒斑がある。64 は直線的に広がる杯部下半で、残存器高 2.6cm である。器面は磨耗のため調整不明瞭であるが、外面の一部に斜方向のハケメの痕跡が認められる。脚部との接合部では、シボリ痕と工具による調整痕が残る。65 は直線的に広がる杯部下半で、残存器高 2.8cm である。器面は磨耗のため調整不明瞭であるが、内面には一部ヘラミガキのような痕跡が認められ、黒斑がある。外面は縦方向のヘラミガキで、脚部内外面はナデである。66 は細く長い脚部で、残存器高 7.7cm である。内面は工具によるナデ、外面は斜方向のハケメが施されており、黒斑がある。67 は裾部へ向かって大きく開く脚部で、復元底径 18.4cm、残存器高 7.9cm である。内面は横方向のハケメの痕跡が認められ、外面は細かく丁寧な縦方向のヘラミガキが施されている。

土製品 (68) 68 は性格不明の土製品である。長さ 4.5cm、幅 2.95cm、厚さ 2.75cm、重さ 28.4g である。全体にナデであるが、平坦に近い面は指頭痕による凹凸がみられ、反対側の凹面には工具痕が認められる。

S X 03 (第 15 図)

調査区の西側に位置する。長さ 3.25 + α m、幅 1.00 m の溝状を呈し、南側の調査区外へ延びる。深さはかなり浅く、3cm 前後である。出土遺物は、ビニール袋 1 袋分で、弥生時代の甕、壺片が主体を占めるが、わずかに土師器の杯片の混入も見られた。

出土遺物 (第 16 図)

甕 (69) 69 は「く字状」の口縁部で、復元口径 16.6cm、残存器高 4.3cm である。内面は磨耗のため調整不明瞭であるが、頸部外面は縦方向のハケメ後、口縁部にかけてヨコナデ調整を施す。

ii . ピット

S P 02 ～ 06 までの 5 基のピットが検出された。S P 02 ～ 04 は調査区の西側、S P 05、06 は中央に位置する。S P 04 は直径 50cm、深さ 15cm、S P 02、03 は直径 30 ～ 35cm、深さ 19 ～ 25cm、S P 05、06 は直径 17.5 ～ 20cm、深さ 10cm 以下である。S P 02 から約 30 点、S P 03、04、06 から各々 10 点前後、S P 05 から 2 点の土器片が出土した。ほとんどが弥生土器の小破片で図示できるものは以下に記す S P 03 出土の 1 点のみであった。

S P 03 (第 15 図)

直径 32.5cm、深さ 19cm の円形を呈するピットである。出土遺物は 13 点で、弥生時代の甕片等である。

出土遺物 (第 16 図)

甕 (70) 70 は「く字状」の口縁部で、残存器高 4.1cm である。内外面とも斜方向のハケメが施され、口縁端部を平坦に仕上げている。断面では粘土接合痕が観察でき、胴部と口縁部の接合部分には、粘土の剥離痕が認められる。

表 1 村下遺跡 A 地点出土遺物観察表①

遺物 番号	種類	器種	出土 地点	変更後の 遺構番号	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 (復元)	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備 考
0001	弥生 土器	甕	SB-1	1号竪穴住居 跡	①(16.0)②12.3+α	口縁部内外面ともハケメ後ヨコナ デ。胴部は内外面ハケメ後外面下半 部でナデ。	A:微細な長石をやや多量、1～2mm程 の石英を少量含む。B:良好。C:外橙 5YR6/6～褐7.5YR4/3、一部黒褐 7.5YR3/1、内橙5YR6/6。	胴部中位外面に黒 斑有り。
0002	弥生 土器	甕	SB-1 SK-27	1号竪穴住居 跡+SP27	②9.6+α ③6.8	胴部外面はハケメ後不定方向の工具 ナデ、内面は縦方向の工具ナデ。底 面はナデ、底部内面は指頭圧後縦方 向の工具ナデ。	A:1～2mm程の石英をやや少量、微細 な長石を微量含む。B:良好。C:外に ぶい橙7.5YR7/4～褐7.5YR4/1、内 にぶい橙7.5YR7/4。	胴部外面に黒斑有 り。
0003	弥生 土器	甕	SB-1 SK-30	1号竪穴住居 跡+SP30	②10.7+α ③(5.5)	胴部外面は縦方向のハケメ後下半部 でヨコナデ、内面はタテナデ。底面は ナデ、底部内面は指頭圧後ナデ。	A:1～2mm程の石英を少量、微細な長 石を少量含む。B:良好。C:外にぶい 褐7.5YR6/3～黒褐7.5YR3/1、内橙 5YR6/6～褐7.5YR4/1。	胴部～底面に黒斑 有り。
0004	弥生 土器	壺	SB-1	1号竪穴住居 跡	②3.2+α ③4.4	胴部外面は縦方向のハケメ。胴部～ 底部内面・底面はナデ。	A:微細な長石を多量、1～2mm程の石 英を少量含む。B:良好。C:外浅黄 2.5Y7/3～暗灰黄2.5Y5/2、一部黒褐 2.5Y3/1、内淡黄2.5Y8/3。	胴部外面～底面に 黒斑有り。
0005	弥生 土器	壺	SB-1	1号竪穴住居 跡	②4.6+α ③5.4	胴部外面は縦方向のナデ。胴部～底 部内面・底面はナデ。	A:微細な長石を多量、1～2mm程の石 英を少量含む。B:良好。C:外褐 7.5YR4/3、内にぶい褐7.5YR5/4。	
0006	石製 品	石包丁	SK-25	1号竪穴住居 跡の炉	長2.1 幅2.6 厚0.6 重3.01	全体に研磨痕あり。		輝緑凝灰岩製。 一部使用痕有り。
0007	弥生 土器	鉢	SK-1	SB02 P1	①15.9②7.2③5.3	内面全体にナデ後、口縁部～体部上 位で横方向のハケメ。体部外面は斜 め方向のハケメ。底面一定方向のハ ケメ。	A:1～3mm程の石英をやや多量含む。 B:良好。C:外一部黒7.5YR2/1、内外 共ににぶい橙7.5YR7/4。	口縁部～体部上位 外面に黒斑有り。
0008	弥生 土器	ミニ チュ ア土 器・ 鉢	SK-1	SB02 P1	①8.4②4.7③2.6	全体は手捏ねによる指頭圧後ナデ。 底面は平滑である。	A:1～3mm程の石英をやや多量含む。 B:良好。C:外一部黒10YR2/1、内外 共に浅黄橙10YR8/4～にぶい黄橙 10YR7/4。	体部下位～底部外 面に黒斑有り。
0009	弥生 土器	甕	SK-14	SK14	①(22.4) ②15.2+α	口縁部ヨコナデ後、上端面に横方向 のハケ。胴部外面は縦方向のハケ メ、内面はタテナデ。	A:1～3mm程の石英を多量含む。B:良 好。C:外暗赤褐5YR3/2～明赤褐 5YR5/6、一部黒7.5YR2/1、内明赤褐 2.5YR5/6。	胴部上位外面に黒 斑有り。
0010	弥生 土器	甕	SK-14	SK14	①(18.6)②7.3+α	口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方 向のハケメ、内面はナデ。	A:1～5mm程の石英をやや多量、1～3 mm程の長石を少量含む。B:良好。C: 外にぶい赤褐5YR4/3、内明赤褐 2.5YR5/6。	
0011	弥生 土器	甕	SK-14	SK14	②7.3+α ③7.1	胴部外面は縦方向のハケメ後、底部 外面に横方向のナデ、内面は工具ナ デ。底面はナデ、内面は指頭圧後工 具ナデ。底部外面～底面のナデはヘ ラミガキのような光沢がある。	A:1～3mm程の石英をやや多く、長石 をわずかに含む。B:良好。C:外明赤 褐2.5YR5/6～暗赤褐2.5YR3/2、内明 赤褐2.5YR5/6～赤黒2.5YR2/1、一部 黒褐7.5YR3/1。	胴部内面に赤黒色 の変色部分有り。
0012	弥生 土器	壺	SK-14	SK14	②6.3+α ③(8.3)	胴部下位外面に縦方向のハケメ後胴 部中位～下位に縦、斜め方向のヘラ ミガキ。胴部～底部内面はヨコナ デ。	A:1～2mm程の長石、1～3mm程の石 英、1mm程の角閃石を少し含む。B: 良好。C:外にぶい黄橙10YR7/4、内 灰白2.5Y8/2～7/1。	
0013	弥生 土器	甕	SK-16 B区	SK16	②4.9+α	外面は口縁部中位以下に縦方向のハ ケメ後ヨコナデ、沈線1条。内面は口 縁端部の粘土貼付の指頭圧後ヨ コナデ。口縁部平坦面は横方向のハ ケメ。	A:1～2mm程の石英をやや多量、微細 な長石を微量含む。B:良好。C:外橙 5YR6/6～にぶい赤褐5YR5/3、内橙 5YR6/6。	
0014	弥生 土器	甕	SK-16	SK16	①(26.3)②13.8+α	口縁部下位～胴部外面に斜め方向の ハケメ後口縁部～胴部にヨコナデ・ ナデ。内面は口縁部で横方向のハケ メ、胴部はナデ。	A:1～5mm程の石英をやや多量、微細 な金雲母を少量含む。B:良好。C:外 にぶい黄橙10YR7/3、内橙5YR6/6～ にぶい黄橙10YR7/3。	
0015	弥生 土器	甕	SK-16 SK-16C 区	SK16	①(18.1)②16.4+α	頸部内面に横方向のハケメ後口縁部 内外面ヨコナデ。胴部外面は縦方向 のハケメ後ナデ、内面はナデ・ヘラ ミガキのような光沢があるタテナ デ。口縁部～胴部上位外面に黒斑有 り。	A:1～3mm程の石英を多量含む。B:良 好。C:外灰黄褐10YR6/2～橙 5YR6/6、一部黒10YR2/1、内にぶい 黄橙10YR7/4～黒褐10YR3/2。	
0016	弥生 土器	甕	SK-16	SK16	①22.4②最小27.3最大27.8③8.0	口縁部内面は横方向のハケメ後内外 面ヨコナデ。胴部外面上～下位に縦 方向のハケメ後、下位に横方向のハ ケメ。底部外面はヨコナデ。底面は ナデ。内面は胴部下位まで斜めナ デ、それ以下は磨耗の為調整不明。	A:1～3mm程の石英を多量含む。B:良 好。C:外にぶい橙7.5YR6/4～灰黄褐 10YR4/2、一部黒10YR2/1、内浅黄 2.5Y7/3。	胴部中位外面に黒 斑有り、煤付着。
0017	弥生 土器	甕	SK-16 SK-16C 区	SK16	①(24.0)②24.3③ (7.4)	口縁部内外面はヨコナデ。頸部内面 は横方向のハケメ。口縁部～胴部下 位外面は縦方向のハケメ、底部外面 は指頭圧後ヨコナデ。底面はナデ。 胴部～底部内面はナデ。	A:1～3mm程の石英を少量、微細な長 石を微量含む。B:良好。C:外にぶい 黄橙10YR7/3～黒褐10YR3/2、一部黒 10YR2/1。内にぶい黄橙10YR7/4。	胴部～底面に黒斑 有り。

表 1 村下遺跡 A 地点出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	変更後の遺構番号	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 (復元)	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
0018	弥生土器	甕	SK-16 SK-16B区	SK16	①29.6②21.0+α	口縁部内外面はヨコナデ。口縁部から胴部外面は斜め方向のハケメ、胴部内面は横方向のハケメ、胴部内面はナデ?	A: 1~3mm程の石英を多量含む。B: 良好。C: 外明赤褐2.5YR5/6~灰褐5YR4/2、内橙5YR6/6~灰黄褐10YR4/2。	
0019	弥生土器	甕	SK-16 SK-16B区	SK16	②6.5+α	口縁部はヨコナデ。胴部外面は斜め方向のハケメ。内面は横方向のヘラミガキ、口縁部に工具痕が残る。	A: 1~3mm程の石英をやや多量含む。B: 良好。C: 内外共に灰褐7.5YR4/2~にぶい褐7.5YR5/4。	
0020	弥生土器	甕	SK-16	SK16	①(26.4)②9.1+α	口縁部下位~胴部外面は斜め方向のハケメ、その後口縁上端部~口縁部外面ヨコナデ。内面は磨耗の為調整不明。	A: 1~5mm程の石英を多量含む。B: 良好。C: 外浅黄2.5Y7/3~にぶい黄橙10YR7/3、一部黒10YR2/1、内にぶい黄橙10YR7/4。	胴部外面に黒斑有り。
0021	弥生土器	甕	SK-16 SK-16C区	SK16	①(29.6)②11.7+α	口縁部下位~胴部外面は斜め方向のハケメ、その後胴部上位内面~口縁部外面ヨコナデ。胴部中位内面は磨耗の為調整不明。	A: 1~3mm程の石英を多量、1mm程の角閃石を微量、微細な長石を微量含む。B: 良好。C: 外明赤褐2.5YR5/6~灰褐5YR4/2、口縁の一部黒7.5YR2/1、内橙5YR6/6~にぶい赤褐5YR5/4。	口縁部平坦面に黒斑有り。
0022	弥生土器	甕	SK-16	SK16	①(24.6)②12.6+α	口縁部はヨコナデ。胴部外面は斜め方向のハケメ、内面はヘラミガキのような光沢があるナデ後上位に不定方向ナデ。	A: 1~5mm程の石英を多量含む。B: 良好。C: 外にぶい橙5YR6/4~にぶい赤褐5YR4/3、内明赤褐2.5YR5/6~にぶい赤褐5YR4/3。	
0023	弥生土器	甕	SK-16	SK16	①(22.8)②23.3③(7.2)	胴部外面は縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向のハケメ後口縁部ヨコナデ。胴部~底部内面は指頭圧・ナデ。底面はナデ。胴部内面に粘土紐接合痕有り。	A: 1~4mm程の石英を多量含む。B: 良好。C: 内外共に橙7.5YR6/6~黒褐10YR3/2。	口縁~胴部中位外面に黒斑、下位に煤付着。
0024	弥生土器	甕	SK-16	SK16	①15.1②19.7③(6.6)	口縁部ヨコナデ。口縁部下位~胴部外面は縦方向のハケメ。胴部内面はナデ後一部に縦方向のヘラミガキのような光沢のあるナデ。底面はナデ・指頭圧、内面はナデ。	A: 1~3mm程の石英をやや多量含む。B: 良好。C: 外にぶい橙5YR7/4~黒褐5YR3/1、内橙5YR6/6~にぶい橙5YR7/4。	口縁部の成形が雑である。口縁部~胴部上位内面に黒斑有り。
0025	弥生土器	甕	SK-16	SK16	②12.2+α③7.4	胴部外面は縦方向のハケメ。底面はナデ。内面は磨耗の為調整不明。	A: 1~3mm程の石英を多量、微細な長石を少量含む。B: 良好。C: 外明赤褐5YR5/6、内橙7.5YR7/6~褐灰7.5YR4/1。	
0026	弥生土器	甕	SK-16	SK16	②11.3+α③8.9	胴部外面は縦方向のハケメ、下位は横方向のハケメ後横方向のヘラミガキのような光沢があるナデ。底面・胴部中位内面はナデ。	A: 1~3mm程の石英を多量、微細な長石を少量含む。B: 良好。C: 外にぶい赤褐5YR5/4~黒5YR1.7/1、内にぶい黄2.6Y6/3。	底面に黒斑有り。
0027	弥生土器	甕	SK-16 B区	SK16	②7.7+α③(8.4)	胴部外面は縦方向のハケメ後下位にヨコナデ。底面はナデ・工具ナデ。内面はナデ。	A: 1~3mm程の石英をやや多量、微細な長石を微量含む。B: 良好。C: 外にぶい黄橙10YR7/3、内にぶい黄橙10YR7/4。	
0028	弥生土器	甕	SK-16	SK16	②7.9+α③(7.8)	外面は胴部で縦方向のハケメ。底部外面~底面は指頭圧後ナデ。内面はナデ。	A: 1~3mm程の石英を多量、1~2mm程の長石を微量、1mm程の角閃石を微量含む。B: 良好。C: 外橙7.5YR6/6~にぶい褐7.5YR5/3、内黒褐10YR3/2。	
0029	弥生土器	甕	SK-16	SK16	②13.9+α③8.9	胴部外面~底部外面は縦方向のハケメ。内面・底面はナデ。	A: 1~3mm程の石英を多量、微細な長石・金雲母を微量含む。B: 良好。C: 外にぶい橙7.5YR6/4~黒褐7.5YR3/2、内黒褐7.5YR3/2。	内面に黒色の変色部分有り。
0030	弥生土器	甕	SK-16	SK16	①(35.5)②25.7+α	口縁部ヨコナデ。胴部上位外面はヨコナデにより三角形の突帯を貼り付ける。突帯以下は縦方向のハケメ。内面上位はヨコナデ、下位はタテナデ。	A: 1~3mm程の石英をやや多量、微細な長石を微量含む。B: 良好。C: 外灰黄褐10YR4/2、一部黒10YR2/1、内にぶい黄橙10YR6/3、一部褐灰10YR4/1~黒10YR2/1。	胴部上半内外面に黒斑有り。
0031	弥生土器	甕	SK-16	SK16	②17.4+α③8.2	胴部外面はタテナデ後下位でヨコナデ。底面はナデ。内面は中位がヨコナデ、下位がタテナデ、クレイター状窪み有り。	A: 1~4mm程の石英を多量含む。B: 良好。C: 外褐7.5YR4/4~明黄褐10YR7/6、一部黒10YR2/1、内浅黄2.5Y7/3。	胴部外面の対称する部分2カ所に黒斑有り。
0032	弥生土器	壺	SK-16 C区	SK16	②9.3+α	胴部外面は上位にヨコナデ、中位に縦方向のハケメ後タテナデ後ヘラミガキ。内面は上位にナデ、中位に横方向の工具ナデ。	A: 1~3mm程の石英・赤色粒を少量、微細な長石を微量含む。B: 良好。C: 外にぶい黄橙10YR7/3~灰黄褐10YR4/2、一部橙2.5YR6/6、内にぶい黄橙10YR7/3。	
0033	弥生土器	壺	SK-16 SK-16C区	SK16	①(18.1)②22.2+α	口縁部下位~頸部外面に縦方向のハケメ後口縁部~頸部内外面にヨコナデ。胴部外面は斜め方向のヘラミガキ、内面はナデ。内面の所々に工具痕。	A: 1~4mm程の石英をやや多量、微細な長石をやや多量含む。B: 良好。C: 外明赤褐2.5YR5/8~黄橙10YR8/6、一部黒10YR2/1、内明赤褐2.5YR5/8。	胴部上位外面に黒斑有り。

表 1 村下遺跡A地点出土遺物観察表③

遺物 番号	種類	器種	出土 地点	変更後の 遺構番号	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 (復元)	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備 考
0034	弥生 土器	壺	SK-16 SK-16C 区	SK16	②15.3+ α	外面は胴部上位ヨコナデ、以下斜め 方向のハケメ後横方向のヘラミガ キ。内面は指頭圧後ナデ、上位に粘 土紐接合痕あり。	A:1～3mm程の石英を多量、微細な長 石を多量含む。B:良好。C:外赤褐 5YR4/6～黒褐5YR2/2、内橙5YR6/6。	
0035	須恵 器	杯	SK-16 D区	SK16	①(13.2)②3.7③8.4	口縁部～体部は回転ナデ。底面は回 転ヘラ切り痕、内面は回転ナデ。	A:微細な白色粒・長石を微量含む。 B:不良。C:外灰白5Y7/2～灰5Y6/1、 内灰白5Y7/1。	
0036	瓦	丸瓦	SK-16 B区	SK16	長6.1+ α 幅9.7+ α 厚1.7	凸面はナデ、1条の沈線。側面はケ ズリ。凹面は布目痕。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:凹灰10Y5/1～灰10Y6/1、 凸灰10Y6/1～灰7.5Y5/1～灰白 10Y7/1。	
0037	弥生 土器	甕	SK-17 I	SK17	①25.8②22.5+ α	口縁部外面と胴部上位内面に指頭痕 有り。口縁部内外面をヨコナデ。頸 部内面横方向のハケメ。胴部外面縦 方向のハケメ、内面ナデ。口縁端部 刻み目。胴部上位に1条沈線。	A:1～3mm程の石英をやや多量、微細 な金雲母・長石を微量含む。B:良 好。C:外橙5YR6/6～にぶい褐 7.5YR5/3、一部黒7.5YR2/1、内橙 5YR6/6。	胴部中位外面に黒 斑有り。
0038	弥生 土器	甕	SK-17 C SK-17 I	SK17	①25.4②22.5+ α	口縁部ヨコナデ。内面に横方向のハ ケメ。外面は縦方向のハケメ。口縁 部下位～胴部外面は斜め方向のハケ メ、内面上位に指頭圧後ナデ。胴部 上位外面に1条沈線。	A:1～3mm程の石英を多量、微細な長 石・金雲母を微量含む。B:良好。C: 外橙5YR6/6～黒褐7.5YR3/2、一部黒 7.5YR2/1、内橙5YR6/6～灰褐 7.5YR5/2。	口縁部～胴部外面 下位に黒斑有り。
0039	弥生 土器	甕	SK-17 SK-17 A SK-17 H	SK17	①26.3②26.9+ α	口縁部ヨコナデ。胴部は外面に縦・ 斜め方向のハケメ、内面に斜め方向 のナデ後縦方向のヘラミガキのよう な光沢があるナデ。	A:1～3mm程の石英をやや多量、微細 な長石を少量含む。B:良好。C:外明 赤褐5YR5/6～褐7.5YR4/3、一部黒 7.5YR2/1、内明赤褐5YR5/6。	胴部外面2ヵ所に 黒斑有り。
0040	弥生 土器	甕	SK-17 SK-17 I B	SK17	①(26.0)②最小29.4 最大30.0③6.9	口縁部ヨコナデ。胴部外面上位に三 角突帯、突帯以下は縦方向のハケ メ、底部外面にナデ。底面はナデ・ 指頭圧。内面はナデ。	A:1～4mm程の石英を多量含む。B:良 好。C:外橙5YR6/8～にぶい黄橙 10YR7/4、一部褐灰10YR4/1、内橙 5YR6/8。	胴部中位外面に黒 斑有り。
0041	弥生 土器	甕	SK-17 K	SK17	①(26.4)②14.0+ α	口縁部外面は縦方向のハケメ後ヨコ ナデ、内面は横方向のハケメ。胴部 は外面に斜め方向のハケメ後ナデ、 内面は指頭圧後ナデ。	A:1～3mm程の石英をやや多量、1～2 mm程の金雲母を少量含む。B:良好。 C:外にぶい黄橙10YR7/4～暗褐 10YR3/3、内にぶい黄橙10YR7/4。	
0042	弥生 土器	甕	SK-17 SK-17 D SK-17 E SK-17 I	SK17	①26.0②最小31.2 最 大31.5③8.6	口縁端部～外面はヨコナデ。内面は 横方向のハケメ。胴部内面はナデ、 外面は縦方向のハケメ。底部外面と 底面はナデ。	A:1～4mm程の石英を多量、1mm程の 赤色粒を少量、微細な長石を少量、 2mm程の金雲母を微量含む。B:良 好。C:内外共に浅黄橙10YR8/4、一 部黒褐10YR3/1。	胴部中位内面に黒 斑有り。
0043	弥生 土器	甕	SK-17 SK-17 H SK-17 A	SK17	①25.6②21.4+ α	口縁部は指頭圧後ヨコナデ。頸部外 面は横方向のハケメ。胴部は外面に 縦方向のハケメ後縦方向のヘラミガ キ、内面にナデ。	A:1～3mm程の石英を多量、微細な長 石をやや多量、1～3mm程の金雲母を 微量含む。B:良好。C:外にぶい黄橙 10YR7/3～橙7.5YR6/6、一部黒 7.5YR2/1、内灰黄褐10YR6/2。	胴部中位外面に黒 斑2ヵ所有り。
0044	弥生 土器	甕	SK-17 L	SK17	①27.2②11.3+ α	口縁部は指頭圧後ヨコナデ。胴部は 外面に斜め方向のハケメ、内面に工 具ナデ後一部に縦方向のヘラミガキ のような光沢があるナデ。	A:1～5mm程の石英を多量含む。B:良 好。C:外にぶい黄橙10YR6/4～灰黄 褐10YR4/2、一部黒10YR2/1、内橙 5YR6/6～黒褐10YR3/1。	胴部内面に黒色 の変色部分有り。胴 部外面黒斑有り。
0045	弥生 土器	壺	SK-17 SK-17 F	SK17	①28.0②32.3+ α	肩部外面はヘラミガキ。他は磨耗の 為調整不明。	A:1～5mm程の石英をやや多量、微細 な長石を微量含む。B:やや不良。C: 外橙5YR6/6～灰褐7.5YR4/2、一部黒 7.5YR2/1、内橙5YR6/6～灰褐 7.5YR4/2、一部黒7.5YR2/1。	頸部～胴部下半の 内外面に黒斑有 り。
0046	弥生 土器	壺	SK-17 SK-17 J	SK17	②13.7+ α ③4.5	胴部外面は横方向のヘラミガキ。底 面はナデ。内面は工具ナデ。	A:1～2mm程の石英をやや多量、1mm 程の金雲母・長石を微量含む。B:良 好。C:外灰黄褐10YR5/2～10YR4/2、 一部黒10YR2/1、内橙7.5YR6/6。	胴部中位～下半の 外面に黒斑有り。
0047	弥生 土器	壺	SK-17 F	SK17	②12.0+ α ③10.0	胴部下位外面は斜め方向のヘラミガ キ。内面はナデ。他は磨耗の為調整 不明。	A:1～5mm程の石英をやや多量、微細 な長石を微量含む。B:やや不良。C: 外橙5YR6/6～灰褐5YR4/2、内灰褐 7.5YR5/2。	
0048	弥生 土器	壺	SK-17 J	SK17	②9.8+ α	頸部～胴部上位外面に縦方向のハケ メ後三角突帯貼付、胴部外面横方向 のヘラミガキ。内面は頸部に横方向 のハケメ、胴部に指頭圧後ナデ。胴 部内面に粘土紐接合痕有り。	A:1～5mm程の石英を多量、微細な長 石を微量含む。B:良好。C:外明赤褐 5YR5/6、内黒褐10YR3/1。	
0049	石製 品	砥石	SK-17	SK17	長4.85 幅3.4 最大厚 1.0	4面に擦痕。両面に溝状の窪み有 り。		砂岩製。鋳型の可 能性あり。
0050	土師 器	杯	SK-55	SK55	②1.7+ α ③(8.6)	体部内外面は横方向のヘラミガキ。 底面は回転ヘラケズリ、内面は回転 ナデ後一定方向ナデ。	A:1～3mm程の赤色粒を少量、微細な 金雲母を少量含む。B:良好。C:内外 共に橙7.5YR6/6。	

表2 村下遺跡B地点出土遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	出土 地点	変更後の 遺構番号	法量 (cm・g) ①口径②器高 ③底径 (復元)	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備 考
0051	弥生 土器	甕	SK-1	SX01	②2. 6+ α ③(6. 0)	体部～底面はナデ、内面は指頭圧・ナデ・一部に縦方向のハケメ	A: 1～3mm程の石英を多量含む。B: 良好。C: 内外共ににぶい黄橙10YR7/2。	
0052	弥生 土器	壺	SK-1	SX01	①(21. 2) ②3. 5+ α	口縁部内外面に斜め方向のハケメ後ヨコナデ。	A: 1～2mm程の石英を多量、1mm弱の白色砂粒をやや多量含む。B: 良好。C: 外にぶい橙5YR6/4、内にぶい黄橙10YR7/2。	
0053	弥生 土器	壺	SK-1	SX01	②9. 7+ α	口縁部はヨコナデ。胴部外面はタタキの痕跡? 上位に縦方向のハケメ、内面上位に指頭圧、中位にナデ。胴部内面に粘土紐接合痕有り。	A: 1～3mm程の石英を多量含む。B: 良好。C: 外にぶい黄橙10YR6/3、内浅黄2. 5Y7/4。	
0054	弥生 土器	高杯	SK-1	SX01	①(29. 8) ②4. 0+ α	口縁部～体部はヨコナデ後外面に暗文のようなヘラミガキ。	A: 雲母をやや多量含む。B: 良好。C: 内外共ににぶい黄橙10YR7/4。	口縁部～胴部外面に黒斑有り。
0055	弥生 土器	甕	SX-2	SX02	①(27. 2) ②5. 8+ α	口縁部は指頭圧後外面で縦方向のハケメ、内面で斜め方向のハケメ、その後ヨコナデ。	A: 1～2mm程の白色粒、1mm程の金雲母を少量含む。B: 良好。C: 外灰黄褐10YR5/2、内にぶい黄橙10YR7/3。	
0056	弥生 土器	甕	SX-2	SX02	②5. 1+ α ③6. 2	胴部外面は縦方向のヘラミガキ。底面はナデ。内面はナデ・指頭圧。内面に粘土紐接合痕、外面に赤彩痕跡有り。	A: 1mm程の白色粒、微細な金雲母を微量含む。B: 良好。C: 外赤彩赤褐2. 5YR4/6、内浅黄橙10YR8/4。	
0057	弥生 土器	甕	SX-2	SX02	②4. 3+ α ③4. 6	胴部外面は縦方向のハケメ。底面はナデ。内面はナデ・指頭圧。	A: 1～2mm程の白色粒、1～5mm程の石英を少量含む。B: 良好。C: 外暗黄灰2. 5Y5/2、内にぶい黄橙10YR7/4。	
0058	弥生 土器	甕	SX-2	SX02	②3. 8+ α ③4. 6	胴部～底面縦方向のハケメ後ナデ、内面はナデ・指頭圧。	A: 1～3mm程の石英をやや多量に含む。B: 良好。C: 内外共に淡黄2. 5Y8/3。	
0059	弥生 土器	甕	SX-2	SX02	②9. 3+ α	胴部内外面・底部内面は斜め方向のハケメ。底面はナデ。	A: 1～3mm程の石英を少量含む。B: 良好。C: 外灰黄褐10YR5/2～にぶい黄橙10YR7/3、一部褐灰10YR4/1、内灰黄褐10YR4/2。	胴部下位～底部外面に煤付着。
0060	弥生 土器	甕	SX-2	SX02	①(13. 8) ②7. 1+ α	外面は胴部の縦方向のハケメ後口縁部～胴部上位にヨコナデ。内面は頸部に横方向のハケメ、胴部上位に指頭圧、その後ナデ。内面に粘土紐接合痕あり。	A: 1～3mm程の石英を少量含む。B: やや不良。C: 外淡黄2. 5Y8/3、内灰白10YR8/2。	
0061	弥生 土器	鉢	SX-2	SX02	②2. 4+ α ③(5. 6)	体部～底部外面はナデ。内面は体部に横方向のハケメ、底部にナデ。	A: 1～2mm程の白色粒を微量含む。B: 良好。C: 内外共に灰黄2. 5Y6/2。	
0062	弥生 土器	高杯	SX-2	SX02	②4. 8+ α	外面は口縁部～体部に縦方向のヘラミガキ、体部下位にナデ。口縁端部はヨコナデ。内面はナデ。	A: 1mm程の石英をやや多量含む。B: 良好。C: 内外共ににぶい橙7. 5YR7/4。	
0063	弥生 土器	高杯	SX-2	SX02	①(33. 2) ②6. 0+ α	口縁部～体部はナデ後内外面に縦方向のヘラミガキ。	A: 0. 5～1mm程の白色粒を少量、1～2mm程の石英を少量含む。B: 良好。C: 外浅黄2. 5Y7/4、一部黒7. 5YR2/1、内浅黄2. 5Y7/4。	口縁部外面に黒斑有り。
0064	弥生 土器	高杯	SX-2	SX02	②2. 6+ α	体部外面は斜め方向のハケメ。杯部・脚部接合部分は工具痕・シボリ痕有り。内面は磨耗の為調整不明。	A: 1～2mm程の石英を少量含む。B: 良好。C: 外浅黄2. 5Y7/3、内浅黄2. 5Y7/4。	
0065	弥生 土器	高杯	SX-2	SX02	②2. 8+ α	体部外面は縦方向のヘラミガキ。杯部・脚部接合部分はナデ。内面は一部ヘラミガキ?。	A: 微細な白色粒を微量含む。B: 良好。C: 外にぶい黄橙10YR7/3、内にぶい黄橙10YR7/3～褐灰10YR5/1。	杯部内面に黒斑有り。
0066	弥生 土器	高杯	SX-2	SX02	②7. 7+ α	脚部外面は斜め方向のハケメ、内面は工具ナデ。	A: 微細な雲母をやや多量含む。B: 良好。C: 内外共ににぶい黄橙10YR7/4、一部褐灰10YR4/1。	外面に黒斑有り。
0067	弥生 土器	高杯	SX-2	SX02	②7. 9+ α ③(18. 4)	脚部外面は縦方向のヘラミガキ。脚端部はヨコナデ。脚部内面の下位は横方向のハケメ、上位はナデ。	A: 1mm程の白色粒を少量含む。B: 良好。C: 内外共ににぶい黄橙10YR7/4。	
0068	土製 品	不明	SX-2	SX02	長4. 5 幅2. 95 厚2. 75 重28. 4	全面にナデ・指頭圧。工具痕有り。	A: 微細～1mm程の白色粒をやや多量、微細な雲母をやや多量含む。B: 良好。	
0069	弥生 土器	甕	SX-3	SX03	①(16. 6) ②4. 3+ α	外面は口縁部にヨコナデ、胴部上位に縦方向のハケメ。内面は磨耗の為調整不明。	A: 1～2mm程の石英を微量含む。B: 良好。C: 外にぶい黄2. 5Y6/3、内浅黄2. 5Y7/4。	
0070	弥生 土器	甕	SK-3	SP03	②4. 1+ α	口縁部内外面は斜め方向のハケメ。口縁端部はヨコナデ。断面に粘土接合痕。粘土剝離痕。	A: 1mm程の石英を少量含む。B: 良好。C: 内外共ににぶい黄橙10YR7/3。	

IV. まとめ

A地点

A地点で確認された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、土坑18基、溝5条、ピット136基である。縄文時代以前の遺物としては、サヌカイトのスクレーパー1点と黒曜石フレイク26点、サヌカイトフレイク7点が挙げられる。主に調査区の中央より東側の遺構（SK 16, SK 17, SD 03, 2号竪穴住居跡）から出土したが、いずれも流れ込みで当該期の遺構は確認できなかった。A地点の最盛期は弥生時代である。時期が明確な遺構としては、前期末から中期初頭の遺物が出土したSK 16、SK 17、中期初頭のSK 14、出土遺物は少ないが、円形住居であることから前期～中期と考えられる3号竪穴住居跡、後期中頃から後半にかけての遺物が出土した1号竪穴住居跡である。また、2号竪穴住居跡は方形の竪穴住居跡と考えられ、遺物の量は少ないが後期の複合口縁壺片や「くの字」口縁の甕片が出ていることから後期の可能性が高い。SB 02についても出土遺物は少ないが、後期の可能性がある。1号竪穴住居跡に切られたすぐ西側の遺構に関しては、出土遺物が少なく詳細は不明であるが、床面が平坦で方形になることも考えられるので後期の住居跡の可能性もある。その他の土坑のうち2/3から遺物がわずかに出土しているが、小破片で一部須恵器片を含むものの、弥生土器と考えられるものがほとんどである。しかし時期を特定できない。ピットでは、30基から遺物が出土しているが、一基あたりの遺物量はごくわずかで、大半は弥生土器片と考えられる。古墳時代以降の遺物としては、図示できた土師器杯（SK 55）、須恵器杯（SK 16）、丸瓦（SK 16）の他、破片が弥生時代の遺構に混入した形でわずかに出土している。また、中世の土師質土器片数点が遺構検出面から出土している。A地点の中で最も新しい時期の遺物としては、SD 01から出土した近世の肥前型紙摺りの磁器片や石炭片が挙げられるが、浅い遺構からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器なども出土していることから、遺構の時期を決定するには至らない。

以上のことから、村下遺跡A地点は縄文時代以前から人々の生活の痕跡が窺われ、弥生時代には生活の中心地としての住居や土坑が作られる。SK 16、SK 17については遺物の出土量が多いが、ほとんどが日常用の甕、壺で、高杯、器台が少量含まれる程度であるため、破損した土器を廃棄した土坑の可能性もある。どちらの土坑からも焼土塊が多数出土しており、これらも廃棄された可能性がある。古墳時代以降については、近世までの遺物が少数出土しているのみで、生活の中心は移動していると考えられるが、調査面積が狭いため、明確なことは言えない。

焼土塊について

SK 17の出土遺物として紹介した235点を含め、全部で347点の焼土塊が出土した。内訳は1号竪穴住居跡と住居内ピットから36点、1号竪穴住居跡に切られる西側の遺構から13点、SK 16から54点、SK 17から235点、その他2号竪穴住居跡、SD 03、それらの遺構の周辺のピットからの出土で、SD 04から東側に集中している。

焼土塊については、『松葉園遺跡Ⅰ』で焼成遺構と関連付けての考察がなされている。今回の出土例も松葉園遺跡の例と似たものであり、土器の焼成時に外側を覆った泥土の可能性を考えたい。

ただし土器の焼成跡と考えられる遺構は確認できなかった。

焼土塊は最大のものでは、5 cm × 4.5 cm × 4 cm である。同様の大きさのもので観察してみると、指の腹を押し当てたような幅 2 cm × 長さ 3 cm の凹みやナデたような痕跡がある面は、橙色や灰白色を呈している。厚みが 3.5 ～ 4 cm あるものが多い。一部に黒褐色の部分があり、そこに木片らしき炭化物が付着している。おそらく粘土の厚みは 4 cm 前後あったと考えられる。この場合、黒褐色の部分はかなり高温の部分にあたり、橙色や灰白色の部分が低温の部分に当たると考えられる。植物の茎の圧痕と考えられる窪みはどの塊にも顕著であり、全体に凹凸が激しい。

B 地点

B 地点で確認された性格不明の遺構 S X 01 から 03 については、いずれも人為的に掘られた遺構とは断定しがたい。S X 01 は、底面に凹凸がかなり見られ、自然の落ち込みに土器が堆積したものと考えられる。また、S X 02, 03 はともに浅く、これらについても同様に、自然の窪みに遺物が混入したものと考えたほうが妥当と思われ、弥生時代の土器の包含層と思われる。全体で整理用コンテナ 5 箱分の遺物が出土したが、1/5 は小片のため、時代や器種が不明である。時代や器種が認識できる遺物の中には、土師器片 7 点の混入が見られるが、他はすべて弥生土器と考えられる。弥生時代後期が主体を占めるが、赤彩の甕の突帯部分や袋状口縁の壺片など中期の可能性のある遺物や弥生時代終末と考えられる甕、高杯片も出土している。

B 地点からは確実に人為的な遺構と考えられるものは検出されていないが、集落遺跡である A 地点からの距離はわずかに 125 m であり、遺物の出土も見られることから、A 地点を含む弥生時代の遺跡の一部にあたると考えられる。

参考文献

『松葉園遺跡 I』 大野城市文化財調査報告書―第 59 集― 大野城市教育委員会 2003

図 版

※ 遺物写真の番号は、挿図中の
遺物の番号と一致する。

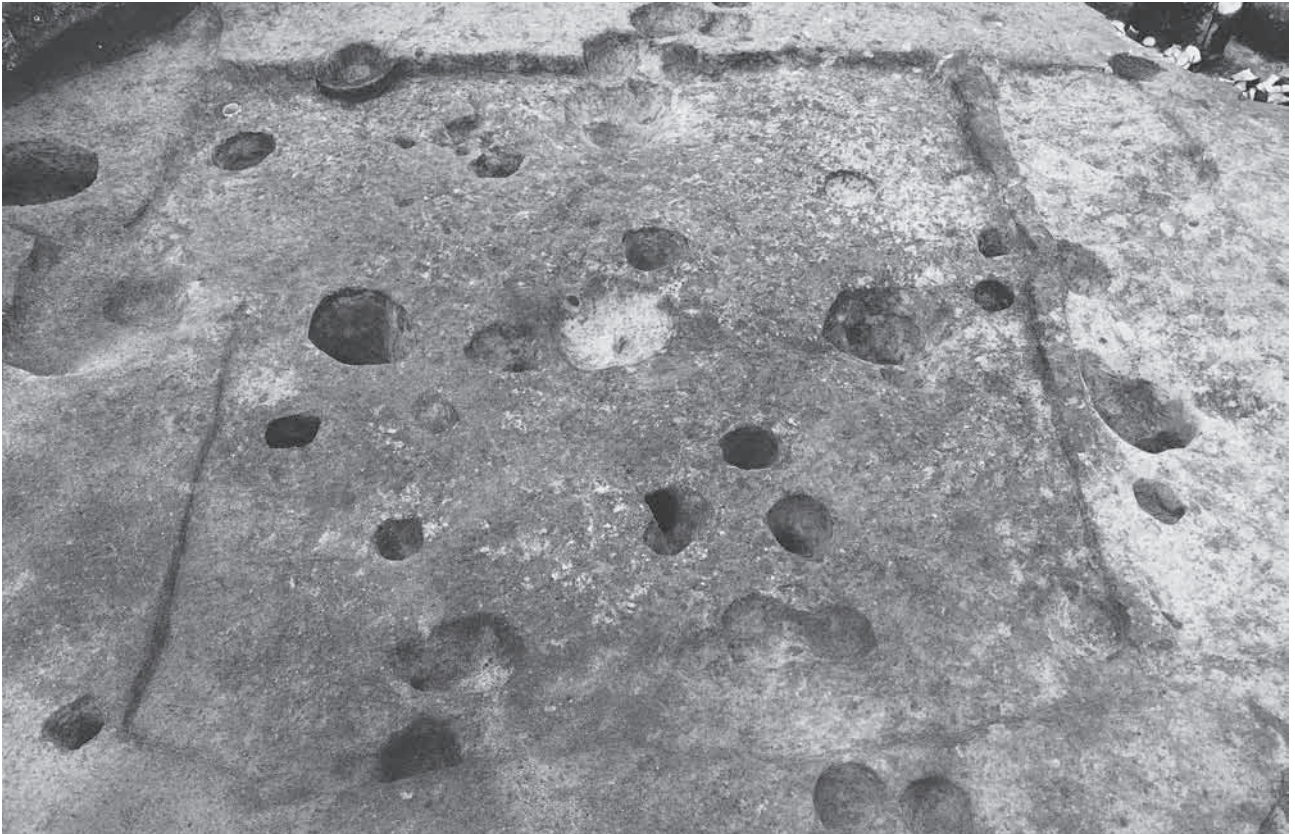


(1) A 地点・調査区東半 全景（南西から）



(2) A 地点・調査区東半 全景（南東から）

図版 2



(1) A 地点 . 1号縦穴住居跡 完掘状況 (北から)



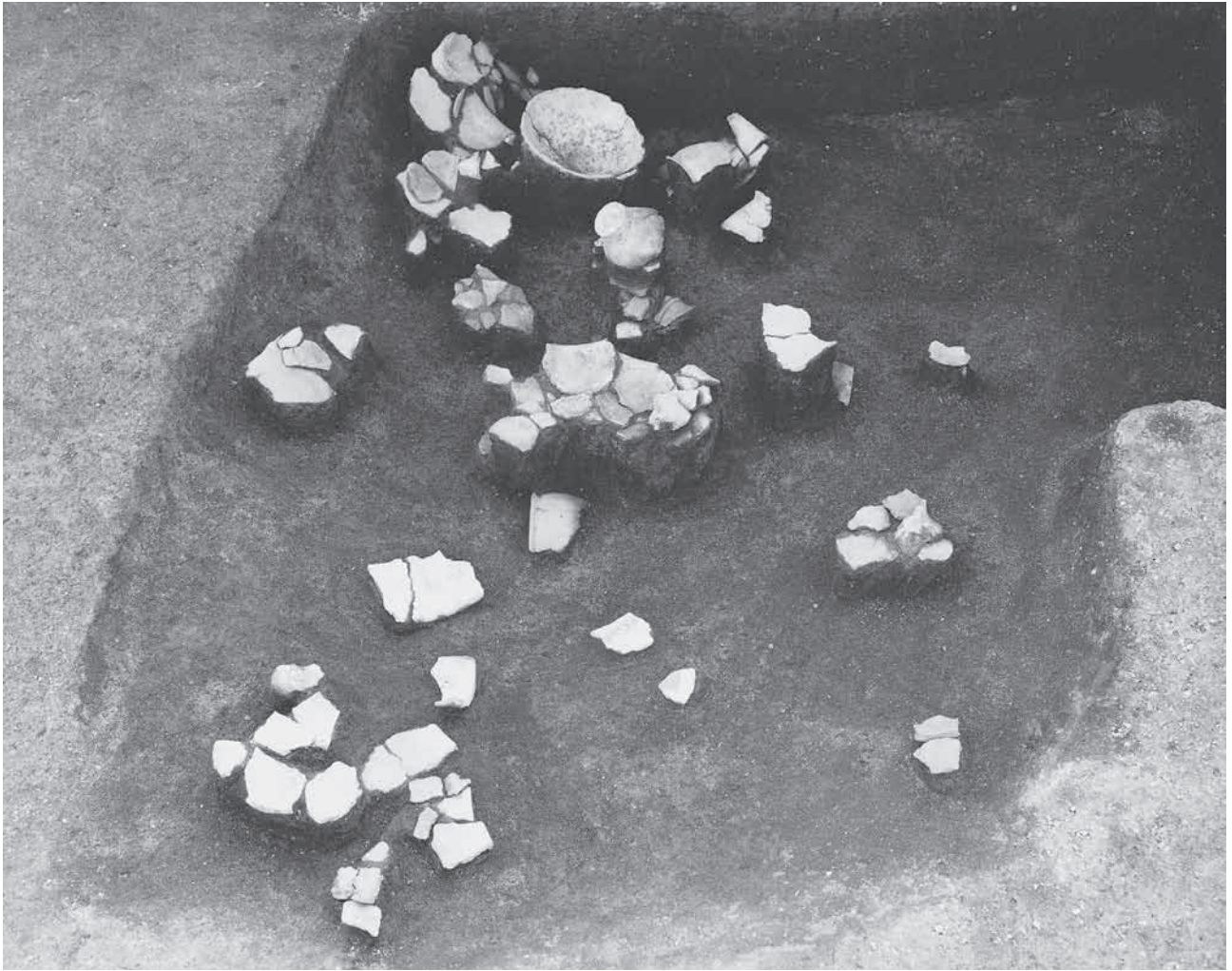
(2) A 地点 . 3号縦穴住居跡・SK 14 遠景 (南東から)



(1) A 地点・3号竪穴住居跡 完掘状況（南東から）



(2) A 地点・SK 16 完掘・遺物出土状況（南西から）



(1) A 地点 . SK 16 遺物出土状況 (北東から)



(2) A 地点 . SK 17 遺物出土状況 (南西から)



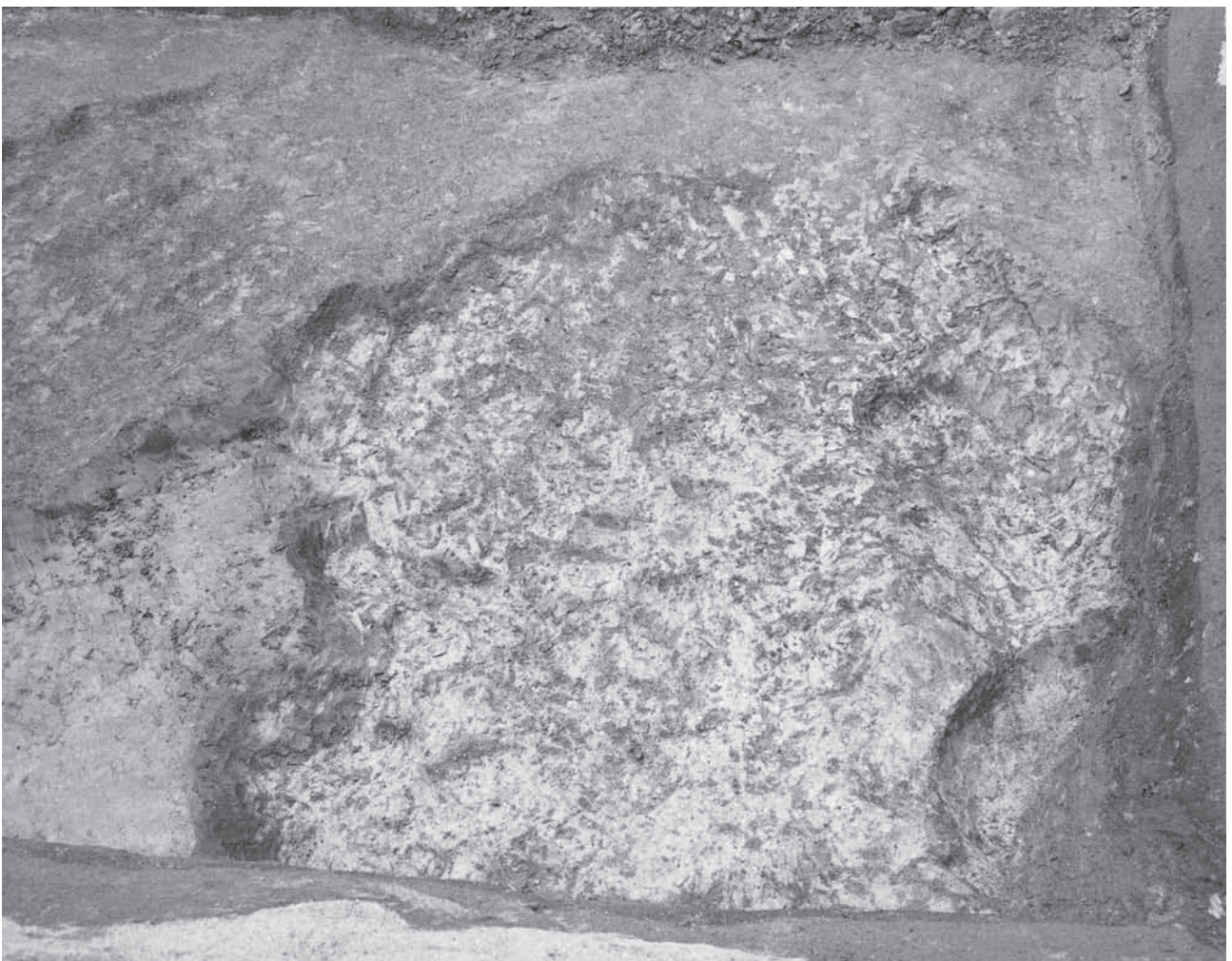
(1) A 地点・SK 17 南側遺物出土状況（北東から）



(2) A 地点・SK 17 北側遺物出土状況（南西から）



(1) B 地点 . 調査区全景 (南西から)



(2) B 地点 . SX 01 完掘状況 (南東から)



7



8



16



17



18



24

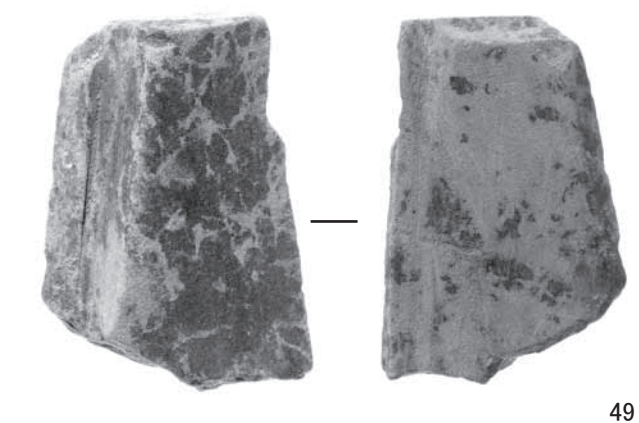


30



32





出土遺物③ A地点 (42 ~ 49 : SK 17), B地点 (59 : SX 02)



60



67



S K17 出土烧土塊



出土遺物④ B地点 (60・67 : SX 02), A地点 (SK 17 出土烧土塊)

S K17 出土烧土塊拡大

報告書抄録

ふりがな	むらしたいせきいち								
書名	村下遺跡 I								
副書名	-A 地点・B 地点の調査-								
巻次									
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第88集								
編著者名	舟山良一、石川 健、毛利恒彦、松尾直子								
編集機関	大野城市教育委員会								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目 2 番 1 号 電話092 (501) 2211								
発行年月日	西暦2009年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積	調査原因	
むらしたいせき 村下遺跡 A 地点	ふくおかけんおおのじょうしつ 福岡県大野城市筒井 1 丁目 498-2			33° 32′ 33〃	130° 28′ 38〃	1987. 4 月 ～ 1987. 5 月	約440㎡	共同住宅 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
村下遺跡 A 地点	集落遺跡	弥生	竪穴住居跡・掘立 柱建物跡・土坑・ 溝跡・ピット	弥生土器・須恵 器・土師器・瓦・ 石製品・焼土塊		4.10 ～5.16			
要約	竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 2 棟、土坑 18 基、溝 5 条、ピット 136 基を検出した。弥生時代前期末から中期初頭の廃棄土坑、前期から中期と考えられる円形竪穴住居跡、後期中頃から後半の方形竪穴住居跡、同じく後期と考えられる方形竪穴住居跡が確認できた。わずかに須恵器、土師器、瓦、近世磁器が出土しているが、関連遺構は確認できなかった。なお、遺跡の西側部分から土坑を中心に、焼土塊が 347 点出土したが、土器焼成の痕跡は確認できなかった。								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積	調査原因	
むらしたいせき 村下遺跡 B 地点	ふくおかけんおおのじょうしつ 福岡県大野城市筒井 1 丁目 747-4		9006	33° 32′ 30〃	130° 28′ 34〃	1990. 7 月	約30㎡	共同住宅 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
村下遺跡 B 地点	集落遺跡	弥生	性格不明遺構・ ピット	弥生土器・土製品		7/16～7/25			
要約	性格不明の遺構としたものは自然の窪みに包含層が堆積したものである可能性が高い。出土した土器は弥生時代後期が主体で、中期から終末までの時期幅を持つ。調査面積が狭いため、詳細は不明であるが、A 地点を含む弥生時代の遺跡の一部にあたると考えられる。								

大野城市文化財調査報告書 第88集

村下遺跡Ⅰ

－ A 地点・B 地点の調査－

平成 21 年 3 月 31 日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷
福岡市南区向野1-19-1

